

60  
105

八種傳染病看護法

059436-000-0

60-105

八種傳染病看護法

油川 太嘉/著

M34

CBF-0304





序  
 大凡何ノ業タルヲ問ハス一定ノ學ヲ修メ實地ノ經驗ヲ積ミ  
 之ヲ行ク其過ナキヲ得ヘシ然レトモ看護ノ業ニ至リテハ  
 音タニ學術經驗ノミヲ以テ足レリトスル能ハス進テ良好ナ  
 ル成績ヲ收メントセハ一ニ其ノ業ニ從フ者ノ精神的關係ニ  
 待サルヘカヲサルナリ

試ニ看ヨ病床ニ呻吟シテ疾苦ヲ訴フル者僅ニ其心ヲ慰ムル  
 一ニ看護婦ノ赤心ニ待ツニアルニアラスヤ況ヤ傳染病患者  
 ノ如キ人生絶望ノ域ニ彷徨スル者只僅ニ一縷ノ望ヲ繫クモ  
 ノ全ク至誠公ニ奉スル看護婦ノ天職ニ待タサルヘカラサル  
 ナヤ故ニ看護婦ノ精神如何ハ直チニ患者ノ病狀ニ反映シテ  
 醫藥ノ奏効ニ至大ノ關係ヲ及ホスモノト謂フヘキナリ然レ  
 トモ看護ノ業ニ從フモノハ先ツ學ヲ修メ經驗ヲ積ミ然シテ





後事ニ當ラサルヘカラス油川太嘉氏茲ニ見ルアリ多年研修  
シタルトコロト實地ノ經驗トニ依リ得タルトコロノモノヲ  
輯メ之レテ上下二卷トナシ世ニ公ニシスノ道ニ志サス者ニ  
資セントス其志ヤ篤シト云フヘシ來テ余ニ序ヲ乞フニ及ヒ  
直ニ所思ヲ述ヘ聊カ以テ其責ヲ塞クト云爾

明治三十四年四月

西澤正太郎

叙

傳染病ノ世ニ流行スルヤ久シ然レトモ醫術ノ未タ開ケサル時ニ  
在テハ其病理ヲ討究スル能ハス治療ノ以テ施コスヘキ無ク豫防  
ノ以テ講スヘキ無ク手ヲ束ネテ其傳播猖獗ニ一任ス豈復タ慘ナ  
ラスヤ今ヤ醫學ノ進歩ハ能ク其病源ヲ拆解シ病理ヲ究竅シ治療  
ノ術豫防ノ法講シ得テ殆ト餘蘊ナシト雖モ之ヲ實地ニ應用スル  
ニ方リテハ手術ノ妙方劑ノ靈未タ以テ足レリトセス必スヤ能ク  
職責ヲ全フスヘキ看護婦其人ヲ得テ而シテ後其奏効ノ完全ヲ  
期スヘキナリ夫レ傳染病看護ノ職タル其責大ニシテ其任重キヲ  
以テ誠實命ヲ守リ慎重事ニ從ヒ加フルニ慈善ノ心ト義勇ノ氣ト  
ヲ以テシテ注意周到病毒ヲシテ屏息他ヲ侵スニ餘地ナカラシムル  
ニ努メサルヘカラス而シテ之ヲ看護婦社會ニ求ムルニ能ク其職  
責ヲ全フスヘキ者ヲ得ルノ至難ナルコトハ吾人ノ曾テ實驗スル



所ニシテ其然ル所以ノモノハ蓋シ傳染病看護法ノ真髓ヲ解セサル者多キニ職由セスンハアラザルナリ而シテ近來看護書ノ梓ニ上ルモノ多シト雖モ特ニ傳染病ニ就キテ詳論セシモノ鮮ナキハ吾人ノ毎ニ遺憾トスル所ナリ前ノ桃山病院首坐看護婦油川太嘉子嬢余ト感テ同フシ勉勵刻苦之ヲ諸書ニ稽ヘ交ユルニ在職中實驗シタルモノヲ以テシ輯メテ一書トナシ八種傳染病看護法ト名ツケ來リテ余ノ校閱ヲ求ム受ケテ之ヲ閱ルニ詳論細說余ノ曾テ遺憾トセシ所ノモノヲ悉セリ此書一タヒ世ニ出ツ庶幾クハ斯學ヲ益スル大ナランカ一言以テ卷首ニ辯ス

明治三十四年四月下澣

醫學士 白江規矩三郎誌

自序

四隣聞トシテ萬籟聲ヲ收メ夜氣沈々トシテ草木モ亦眠ラントスルノ時獨リ病者ノ榻邊ニ坐シ孤燈ヲ剪テ熟ラ其顔ヲ見ルニ及ンテ吾人ハ果シテ如何ノ感カアル身ハ病岸ニ臥スルコト久シク顔色憔悴容貞枯槁幽息微カニ通シ苦悶交モ臻リ神心腦乱シテ復々人事ヲ省セサルノ時ニ於テモ尙妻ト呼ヒ兒ト叫ヒ空ヲ摸シ被ヲ撫シテ連リニ愛戀ノ情ヲ叙ヘ病苦ノ外更ラニ苦悶ノ其身ニ在ルアルカ如ク爾リ退ヒテ其家眷ノ狀態ヲ聞ケハ父母昆弟妻子アリ一人ノ勞彼ニ待テ漸ク其口ヲ糊シ儘カニ飢寒ヲ免ル而ルニ今ヤ良人ノ病ニ罹ルヲ以テ恰カモ悶夜ニ燈火ヲ失ヒシカ如ク悲惨又譬フヘカラスト加之ナラス家人ハ交通ヲ遮斷セラレ患者ハ病院ニ隔離セラル、ヲ以テ妻子ト雖モ終ニ其側ニ待スルコト得サルニ至リテハ既ニ生別タリ幾ナラス更ニ又死別ニ遇フノ如キ何ソ夫レ慘ナルノ甚太シキヤ思フテ茲ニ至レハ腑腸寸斷血湧キ肉振ヒ泣カヤラント欲スルモ能ハサルナリ



所ニシテ其然ル所以ノモノハ蓋シ傳染病看護法ノ真髓ヲ解セサ  
ル者多キニ職由セスンハアラザルナリ而シテ近來看護書ノ梓ニ  
上ルモノ多シト雖モ特ニ傳染病ニ就キテ詳論セシモノ鮮ナキハ  
吾人ノ毎ニ遺憾トスル所ナリ前ノ桃山病院首坐看護婦油川太嘉  
子嬢余ト感テ同フシ勉勵刻苦之ヲ諸書ニ稽ヘ交ユルニ在職中實  
驗シタルモノヲ以テシ輯メテ一書トナシ八種傳染病看護法ト名  
ツケ來リテ余ノ校閱ヲ求ム受ケテ之ヲ閱ルニ詳論細說余ノ曾テ  
遺憾トセシ所ノモノヲ悉セリ此書一タヒ世ニ出ツ庶幾クハ斯學  
ヲ益スル大ナランカ一言以テ卷首ニ辯ス

明治三十四年四月下辭

醫學士 白江規矩三郎誌

自序

四隣聞トシテ萬籟聲ヲ收メ夜氣沈々トシテ草木モ亦眠ラントスルノ時獨リ  
病者ノ榻邊ニ坐シ孤燈ヲ剪テ熟ラ其顔ヲ見ルニ及ンテ吾人ハ果シテ如何ノ  
感カアル身ハ病聲ニ臥スルノ久シク顔色憔悴容良枯槁幽息微カニ通シ苦悶  
交モ臻リ神心腦乱シテ復々人事ヲ省セサルノ時ニ於テモ尙妻ト呼ヒ兒ト叫  
ヒ空ヲ摸シ被ヲ撫シテ速リニ愛戀ノ情ヲ叙ヘ病苦ノ外更ラニ苦悶ノ其身ニ  
在ルアルカ如ク爾リ退ヒテ其家眷ノ状態ヲ聞ケハ父母昆弟妻子アリ一人ノ  
勞役ニ待テ漸ク其口ヲ糊シ儘カニ飢寒ヲ免ル而ルニ今ヤ良人ノ病ニ罹ルテ  
以テ恰カモ闇夜ニ燈火ヲ失ヒシカ如ク悲惨又譬フヘカラスト加之ナラス家  
人ハ交通ヲ遮斷セラレ患者ハ病院ニ隔離セラル、ヲ以テ妻子ト雖モ終ニ其  
側ニ待スルヲ得サルニ至リテハ既ニ生別タリ幾ナラス更ニ又死別ニ  
遇フノ如キ何ソ夫レ慘ナルノ甚太シキヤ思フテ茲ニ至レハ腑腸寸斷血湧キ  
肉振ヒ泣カサラント欲スルモ能ハサルナリ



飯リニ病病ヲ以テ敵軍ト見ハ其流行跳梁ノ秋ハ即チ骨山血河ノ修羅場ニシ  
テ之レニ用フル細帶藥品ノ類ハ銀銃砲藥ナリ醫士看護婦ノ輩ハ將校兵卒ナ  
リ三者其一ヲ闕カハ豈能ク全勝ヲ奏シ凱歌ヲ揚グルコト得ンヤ況ンヤ傳染  
病ハ其慘害ノ及ホス處決シテ稍煙彈雨ノ比ニ非サルニ於テナヤ  
今ヤフヒルヒヨウ。コツホノ如キ驍將ニ嶄新藥血清ノ如キ貔貅アリテ武ヲ  
練リ兵ヲ磨キ歸死回生ノ壘ヲ築キ豫防消毒ノ砲ヲ備ヘ旗幟堂々トシテ威風  
山岳ヲ壓シ以テ病軍ニ對ス勝算ノ歴々タルト恰カモ獲ニ物ヲ搜ルカ如ク然  
リ忽チ見ル鉄蹄地ヲ動カシ賊降天ニ震ヒテ至リ肉薄シテ急ニ攻ムルニ會セ  
ハ應戰未タ幾何ナラスシテ外廓早ク破レ前門又守ヲ失ヒ後衛從ツテ潰ヘ死  
屍壘々トシテ濠ニ充テ勝敗全ク其地ヲ異ニスルハ是レ傳染病流行時ノ眞景  
ナリ此時ニ當リ職ニ看護婦ニ奉スル者ハ須ラク粉骨摧身軀ノ劍下ニ在ルヲ  
忘レ直進邁往前後ニ馳突シ左右ニ轉廻シ殊死奮闘一以テ萬ニ當リ刀折レ矢  
盡キ沈寗蛙ヲ生スルニ至ルモ尙背進セサル底ノ勇氣ナクンハ焉ソ能ク汪淵

ヲ既倒ニ回スヲ得ンヤ看護婦ノ任豈又重カラストセンヤ  
由來男子國ニ報ユルノ義務ハ屍ヲ馬革ニ裹ムニ在リ若シ夫レ一朝事アラ  
カ厥起奮躍刀槍ヲ手ニシ戰場ニ馳騁シテ以テ仇ヲ千里ノ外ニ退クルニ在  
ルニミ翻テ吾人婦女ヲ願ミレハ徒ニ家室ニ籠居シ柳腰衣袂ニ堪ヘサルカ如ク  
織々嬋々トシテ互ニ相誇ル因襲ノ致ス處ト雖モ抑モ亦迂腐ノ極ナリ  
家ヲ齊ヘ兒ヲ教ユルハ元ト之レ婦人ノ任ナリ然リト雖モ吾人職ニ看護婦ニ  
奉スル者ハ其間自カラ徑庭ナキヲ得ス昔時黃鳥ミナナチヤク嬢ノ一タヒ赤十字ヲ唱ヘ  
ヨリ以來天下靡然トシテ之レヲ贊シ今ヤ邦トシテ其盟約ニ加ハラサルハナ  
ク人トシテ其社員タラサルハナシ文運ノ然ラシムル處ト雖モ焉ソ嬢ノ至誠  
天地ヲ撼セシム非サルナキヲ知ランヤ夫レ然リ豈夫レ然ランヤ嬢ハ管ニ赤  
十字ヲ以テ國家民人ヲ救ヒシノミニ非ス併セテ吾人婦女ノ惰眠ヲ掇破シ大  
ヒニ吾人ノ天職ヲ發揮セリ吾人豈一言ノ謝辭ナクシテ可ナランヤ  
妾菲才敢テ自カラ當ラスト雖モ幼ヨリ志ニ愛ニ在リ嚮キニ日本赤十字社病



院ヲ卒業シ尋テ職ニ大阪桃山避病院ニ奉シ院長醫學士白江規矩三郎氏ニ從  
 ヲテ大ヒニ資スル處アリ偶々百斯篤病發生スルニ遇フ人心恟々トシテ滿都  
 厥然タリ氏其間ニ處シ泰然トシテ動カス日夜診療衣食ニ違ナク斯道ヲ研鑽  
 シテ敢テ怠ルコトナシ蓋シ氏ハ卓秀ノ國手ニシテ併セテ熱淚萬斛ノ士ナリ噫  
 妾ハ是レ何等ノ好運女ソ此ノ如キノ人ニ師事シ又能ク此ノ如キノ看護ニ從  
 事シ親シク敵ト鋒ヲ交ユルノ機ヲ得タリ爾來敢々トシテ轉々其職ニ勵ム久  
 之シテ檢疫官馬場碩一氏終ニ百斯篤ノ爲メニ逝キ令闔モ相續テ没ス吁々悲  
 カナ馬場氏ハ篤實率直夙ニ博聞ヲ以テ鳴ル妾ヤ氏ノ洵治ヲ蒙ルコト深ク且ツ  
 大ナリ而シテ今ヤ空シ氏ヤ其職ニ倒ル元ヨリ以テ瞑スヘント雖モ妾ヤ此ノ  
 良師ヲ失フ悲哀胡ソ限ラン咄汝百斯篤終ニ我カ師ヲ奪ヒ吾人ヲシテ更テニ  
 又前途ニ一仇敵ヲ加ヘシム  
 「ペスト」ニ關シテハ世未ダ定説ナシ加旃フルニ病勢劇甚ニシテ且ニ病ヲ夕ニ  
 死ス人心ノ恟願スル洵ニ所以アリトス而シテ妾ヤ永ク先生ノ教示ヲ受ケ親

シク患者ノ傍ニ侍シ幸ニシテ其蘊ヲ搜ルヲ得タリ依テ學ブ處ヲ輯メテ一書  
 トナシ常ニ之レヲ坐右ニ置キ以テ長ヘニ先生ノ恩ニ銘セントス會々人アリ  
 之レカ刊行ヲ勸ム妾ヤ徒ニ名聲ヲ術フ者ニ非スト雖モ深ク收メテ隠サシヨ  
 リハ寧ロ之ヲ願フ之レヲ售リ同志ト共ニ更ラニ研究琢磨シ以テ此ノ仇敵ヲ  
 塵殺スルヲ得ハ實ニ斯學ノ爲メノミニ非ス幾庶クハ以テ先生ニ酬ユヘキカ  
 刻成ル名ツケテ八種傳染病看護法ト云フ諸氏幸ニ微意ノ有ル處ヲ諒セラル  
 レハ幸甚以テ序ト爲ス

維時明治卅四年一月於水口寓居

編者謹識



# 八種傳染病看護法目次

前編

◎總論

◎傳染病看護法通則傳染病豫防法

○第一 清潔法

○第二 看護者ニ對スル清潔法

○第三 隔離法

○第四 隔離室及避病院

○第五 消毒法

○第六 化學的消毒法

○第七 消毒施行法

○第八 八種傳染病者看護ノ概要

一丁

九丁

一三丁

一四丁

一五丁

一六丁

一八丁

二二丁

二六丁



○第九 血清療法ノ大意及看護者ノ注意  
後 編

三五丁

◎腸室扶斯病者看護法

○第一 發生及傳染經路

一丁

○第二 看護法

五丁

◎赤痢病者看護法

○第一 發生及傳染ノ經路

二〇丁

○第二 看護法

二二丁

◎虎列拉病者看護法

○第一 虎列拉病ノ發生及傳染經路

二六丁

○第二 看護法

二七丁

◎發疹室扶斯看護法

○第一 發生及傳染經路

三〇丁

○第一 豫防及消毒法

三二丁

○第三 看護法

三三丁

◎痘瘡看護法

○第一 發生及傳染經路

三五丁

○第二 豫防及消毒法

三八丁

○第三 看護法

三九丁

◎猩紅熱看護法

○第一 發生及傳染經路

四二丁

○第二 豫防及消毒法

四三丁

○第三 看護法

四四丁

◎實扶的里亞看護法

○第一 發生及傳染ノ經路

四六丁

○第二 看護法

四九丁



◎百斯篤病看護法

○第一 發生及傳染經路

五三丁

○第二 豫防法

六二丁

○第三 消毒法

六七丁

○第四 看護法

六八丁

◎一般看護上ノ注意

七〇丁

八種傳染病看護法目次終

# 八種傳染病看護法

前編

醫術開業 醫學士 白江規矩三郎君校閱  
試驗委員  
日本赤十字社準備看護婦 油川太嘉著

著者藏版



◎百斯篤病看護法

○第一 發生及傳染經路

五三丁

○第二 豫防法

六二丁

○第三 消毒法

六七丁

○第四 看護法

六八丁

◎一般看護上ノ注意

七〇丁

八種傳染病看護法目次終

# 八種傳染病看護法

前編

醫術開業 試驗委員 醫學士 白江規矩三郎君校閱

日本赤十字社準備看護婦 油川太嘉著

著者藏版



八種傳染病看護法(前編)

醫學士 白江規矩三郎 閱

日本赤十字社準備看護婦 油川太嘉 著

總論

總テ傳染病毒ハ最モ微小ナル有機体ニシテ或種ノ經路ニ由リテ他ノ動物体ニ浸瀰シ傳播蔓延ス之レヲ病毒ノ傳染或ハ疾病ノ流行ト云フ而シテ此有機体ヲ病原菌ト稱シ諸種ノ傳染性疾患ノ多クハ此ノ病原菌ニ基因スル者ナリト雖モ其病原菌ノ發見セラレサルモノ亦尠ナカラス。

病原菌

病原菌ハ汎ク之レヲ細菌ト云フ最モ微小ノ小有機体ニシテ一滴ノ水中ニ其幾萬ヲ保タシムルニ足ル而モ尙能ク自体固有ノ生活機能ヲ具ヘ外界諸物生活ノ要約ニ適スル時ハ驚クヘキ速度ヲ以テ發育繁殖シ一日數百萬以上ニ及フ者ニシテ其形狀ハ桿狀或ハ球狀或ハ螺旋狀等其他尙雜異ノ形狀ヲ有スレモ何レモ至微至細ニシテ強度ノ顯微鏡



傳染

ノ力ヲ借リ數百倍乃至數千倍ニ廓大シ初メテ目視シ得ヘク如何ニ鏡  
敏ナル視覺ヲ有スル者ト雖モ到底肉眼ヲ以テ明視シ得可ラサル者也  
其傳染タルヤ人体ノ呼吸器或ハ消化器或ハ氣孔或ハ皮膚ノ創傷等ニ  
由リテ侵入スル者ニシテ病原菌ノ種類ニ由リテ各固有ノ經路ヲ取リ  
呼吸ニ由リテハ呼吸器ニ食物ニ由リテハ消化器等ノ如ク爰ニ發育  
繁殖シ其病毒ノ作用ニ由リテ局所ノ疾患ヲ醸シ或ハ毒質ノ血液ニ  
吸收セラル、ニ於テ中毒ニ由テ終ニ全身ノ諸症狀ヲ發スルニ至ル者  
ナリ然レモ假令ハ病毒ノ体内ニ侵入スルコトアルモ體質ニ由リテハ  
其細菌ノ發育ヲ許サス自滅シ或ハ疾病ヲ發スルニ至ラズシテ止ム事  
アリ之レ其體質ノ細菌毒素ノ抗抵ニ富メル即チ抗毒素質或ハ免疫質  
ニ依ルモノニシテ昔時虎列刺ノ大ヒニ流行セシ時一家數人同病ノ爲  
メニ斃レ其猛毒ノ裡ニ在リテ百方看護ニ從事セシモノ僅カニ一人免  
疫セルカ如キ其實例ニシテ假令ハ病毒ヲ受クルモ幸ニ免疫質ナルカ  
又ハ胃ノ强健ナルカ爲メニ其内溶液ニ由リテ殺菌シ得タル例亦鮮ナ  
カラス然レモ之ニ反シ一般ニ營養不足ニシテ虛弱ナルノ人又ハ呼吸

地病毒ノ所在

器及ヒ消化器ニ疾患アルノ人ニ在テハ病毒ニ感染スルコト最モ早ク  
且ツ危険ナル者トス。  
病原菌ノ体内ニ侵入シテ後チ毒質ヲ感受シ發病スルニ至ルマテノ期  
間ハ之レヲ潜伏期ト云ヒ各種ノ疾病及ヒ體質ニ由リテ長短一様ナラ  
ズ其間ニ於テ身体ノ違和ヲ生シ固有ノ本症狀ヲ發起スルニ至ルノ前  
徵ヲ示ス之レヲ前驅症ト云フ。  
傳染病者ノ看護ニ從事セント欲スル者ハ先ツ必ラス病毒ノ所在地並  
ニ狀況傳染ノ經路及ヒ如何ニシテ之レヲ感受シタルカ其他抗拒ノ方  
法等ヲ詳カニ考知スルニアラサレハ管ニ其實効ヲ奏スルヲ得サルノ  
ミナラス却テ危険ヲ醸スノ源基トナル者ナリ。  
病毒ノ所在地即チ病毒ノ巢窟傳染ノ淵藪ハ患者ノ排泄物ニシテ病毒  
ヲ含蓄スル最モ危険ナル傳染ノ泉源ナリ即チ虎列刺患者ノ吐瀉物、腸  
室扶斯及ヒ赤痢患者ノ糞便、發疹室扶斯、猩紅熱、痘瘡患者ノ皮膚ノ剝落  
片及ヒ分泌排泄液、實扶的里亞、肺結核患者ノ咯痰及ヒ唾液等ニ於ケル  
カ如シ又毒力ノ強弱生存ノ長短ニ就テハ新鮮ニシテ濃厚ナル排泄物



感染ノ経路

中ニ在リテハ毒質強ク空氣若シクハ水中ニ於テ稀釋セラル、時ハ毒質弱ク乾燥及滋養ノ缺乏日光ノ曝露他種菌ノ發育繁殖等ハ毒質ヲ消失セシメ之レニ反シテ排泄物ヲ濕潤ノ状態ニ保存シ冷闇處ニ置ク等ハ永ク生存力ヲ附與スル者ナリ又免疫體質ニ在リテハ其排泄物ハ仮令健康者ノモノト雖も間々毒質ヲ含有スルコトナキヲ保シ難シ又排泄物ニ由リテ汚染セル衣服、器具、物品、病室ノ空氣、土地、下水、患者及死体等モ亦第二ノ病源地トナル者ニシテ殊ニ病毒ヲ直接ニ受クヘキ便器、唾壺、剥落片ヲ充シタル器物等ハ皆病毒ノ淵藪ナリ。  
感染ノ経路ニ就テハ各菌固有ノ経路ヲ取リテ傳染スル者ニシテ觸接ニ因テ感染スル者ハ皮膚及粘膜ノ感受ニ適セル者アルニ由リ或ハ汚染シタル手指、手巾ニテ眼、口、鼻等ニ觸レ或ハ皮膚ヲ搔爬スル等ニ由テスル者ニシテ即チ實扶的里亞、虎列拉、奎扶斯、赤痢、百斯篤、發疹奎扶斯、猩紅熱、痘瘡等ノ如シ又病毒ヲ混入セル飲食物ニ由リ消食器ヨリスル者ハ奎扶斯、赤痢、虎列拉等ニシテ病毒ハ其飲食物中ニ於テ發育シ之レヲ攝取シ或ハ其不潔水ヲ以テ合嗽シ又ハ食器ヲ洗滌スル等ニヨリ最モ

危険ナリ又呼吸ニ由リテ傳染スル者ハ病毒ノ塵埃或ハ氛圍氣中ニ飛散セル者ヲ吸入スルニヨリテ感染スル者ニシテ實扶的里亞、發疹奎扶斯、痘瘡ノ如キ之レナリ又蚤、蚊ノ如キ蟲類ノ擔ヘル病毒ハ其蟄所ヨリシ蠅、蛇等ハ飲食物ニ其病毒ヲ附着スルニ由リテ傳染スルコトアリ而シテ其傳染経路ハ病種及菌種ニ由リテ各々差異アル者ナレハ宜敷後章各病候ニ就テ參照スヘシ。

病毒ハ種々ナル場合ニ於テ生存ニ特別ノ法方ヲ施スニアラサレハ依然トシテ其生活力ヲ保續シ數日或ハ數年ノ久シキニ渉ルマテ潜伏ス而レテ一朝其時ヲ得ルニ遭ヘハ忽チ繁殖瀰漫シ終ニ大流行ヲ來タシ如何ニ嚴密ナル消毒法ヲ施行スルモ細菌ハ容易ニ全滅セス類リニ災害ヲ流布シ永ク慘禍ヲ遺スニ至ル其例証ヲ求ムレハ輒近(明治三十一年十月頃)阪神地方ニ流行セシ百斯篤ノ如ク一時ハ將ニ終熄ニ垂ントセシカト入シカラスシテ死灰再ヒ燃ヘ益々其毒煙ヲ漲ラシ終ニハ交通機關ヲ介シテ和歌山縣下ニマテ侵入セシコトアリキ故ニ人口多ク交通頻繁ノ都會ニ在リテハ最モ其ノ病毒ノ剪滅ヲ期セサルヘカテサルナリ。



看護者ノ任

百斯篤病ハ元ト東亞地方ニ於テ流行シタル者ナレド幸ニ未ダ本邦ニ  
輸入セラレザリシヲ以テ近來マテ之レヲ發スルニ至ラザリキ彼ノ虎  
列拉病ノ如キモ往昔他邦ヨリ輸入セラレタルニ由ル此ノ如ク一回發  
生スルトキハ全ク其根源ヲ絶ツコト頗ル難事ニシテ隨ツテ時ニ流行  
シ或ハ散熄シテ其病毒ハ時機ヲ窺ヘル者ノ如シ。  
傳染病看護ニ従事スル者ハ常ニ緻密ナル注意ヲ要シ僅微ノ遺漏アル  
ヲ許サス何トナレハ其病毒ノ發見セラレタル者ニシテ傳染ノ經路及  
ヒ其生活ノ狀態等ハ悉ク明知セラル、ト雖ヒ細菌ハ又如何ナル場合  
ニ於テ生活ヲ保續シ潜伏シツ、アルカハ學理ニ由ルモ尙判別スルコ  
ト能ハサレハナリ況ンヤ未ク充分ナル研鑽及ヒ發見アラサル未定ノ  
病毒ニ於テオヤ看護者ノ其病者ニ對スルハ常ニ劔戟ヲ取テ敵陣ニ臨  
ムカ如ク思惟シ緯々タル觀察ヲ爲スニ怠ルヘカラス若シ夫レ些ノ怠  
慢アラソカ看護者ハ反リテ病毒ヲ繁殖傳播セシムル一ノ有害器械ト  
ナルニ至ル況ンヤ傳染病ハ所謂國家的疾患ニシテ各箇人ノ利害ノミ  
ニ止マラス其盛衰ハ洵ニ社會全般ノ人類動物ニ絶大ノ影響ヲ及ホス

ヘキ者ナレハ其ノ看護ニ従事スル者ハ事ニ當リテ常ニ此ノ觀念ヲ保  
持シ孜孜トシテ蘊奧ヲ講研シ一朝流行ニ際シテハ蹶起一番身命ヲ抛  
ツテ殫窮盡粹シ病毒ノ蔓延傳播ヲ防禦セサルヘカラスナルナリ之レ傳  
染病看護ニ従事スル者ノ最大主眼ナルノミナラス實ニ其任務タルト  
ヲ忘ルヘカラス而シテ傳染病中法律ノ規定ニ從ヒ之レヲ取リ扱ハサ  
ルヘカラスサルモノ即チ虎列拉、赤痢、痘瘡、瘰癧、發疹、瘰癧、實扶的、里亞  
猩紅熱、百斯篤、等ニ在リテハ其傳染蔓延ヲ防禦シ且ツ治療ノ完全ヲ得  
セシメンカ爲メニ各地概テ隔離室或ハ避病舎ノ設立アリテ發生スル  
毎ニ直チニ患者ヲ茲ニ收容シ嚴ニ交通ヲ遮斷セシムルヲ以テ病者ハ  
家ニ在ル如ク親シク父母兄弟或ハ其親族ニ由リテ安慰ヲ得ンコト難  
ケレハ病者ニ惱マサル、ノ外憂愁交々至リ更ニ歡樂ヲ感スル事ナキ  
ヲ以テ看護者タルモノハ務メテ慈愛ノ心ヲモテ父母兄弟ニ代リテ其  
病者ヲ慰メ其身病室ニ在ルモ尙家庭團樂ノ裡ニ在ルカ如クナラシメ  
以テ完全ナル醫治ノ効果ヲ得セシメサルヘカラスナルナリ。  
世人稍々モスレハ避病舎ヲ目シテ一種ノ歌鬼殿トナシ一タヒ愛ニ收



容セラルレハ決シテ生歸スル者ナシト爲シ轉々逃避隠蔽シ啻ニ醫治  
ヲ受ケシメサルノミナラス反リテ益々病毒ヲ散播セシムルニ至ルハ  
其實全ク看護者ニ在リト云フモ決シテ逃ルハニ辭ナキナリ。  
傳染病者ノ看護ニ從事スル者ハ須ラク此クノ如ク常ニ慈愛心ニ富ミ  
温容柔姿ニシテ且ツ學術伎倆ニ練熟セサルヘカラスト雖ヒ退ヒテハ  
更ニ深ク自体ヲ愛攝シ常ニ病魔ニ抗スルノ体力ヲ養ハサルヘカラス  
如何ニ賭技ニ通シ慈愛ニ富ムル者ト雖ヒ身体ノ健康ヲ害スルニ至ッ  
テハ復々終ニ如何トモナスヘカラス。  
左ニ八種傳染病ニ對スル看護法及豫防法、消毒法等ヲ列記シ順次之レ  
ヲ詳解セントス。

総論終リ

## 傳染病看護法通則

### 傳染病豫防法

#### 第壹 清潔法

清潔法

不潔ノ生存保護上ニ大ナル害ヲ及ホスコトハ浴ク人ノ熟知スル處ナル  
モ特ニ傳染病豫防上ニハ絶大ナル害ヲ有スルコトハ一層驚クヘキ者  
ニシテ不潔ハ實ニ病毒ノ發育ヲ扶ケ且ツ其傳播蔓延ノ媒介物トナル  
者ナリ。

清潔ノ意義

清潔ナル意義ノ解釋ハ區域甚々廣濶ニシテ其有形タルト無形タルト  
ヲ論セス苟モ僅微ノ汚穢アルヘカラス然ラサルハ傳染病豫防上些ノ  
利益ナキノミナラス奇功神ノ如キ藥餌モ卓拔老練ノ國手モ終ニ施ス  
ヘキニ由ナシ世人ハ常ニ清潔ヲ口ニスルモ只身体衣服ノ一部ノミニ  
注意シ其他ヲ顧ミサルモノ往々ニシテ有リ此ノ如キハ決シテ清潔ヲ  
完全ニセシ者ト云フヘカラス否寧ロ一種ノ性癖ニ過キサルナリ  
不潔ナル箇所ニハ多ク病毒ノ潜蟄シ易キ者ニシテ隨テ疾病ノ煙ヲ揚



清潔ノ區域

タル者ナリ不潔ノ害ハ健康者ヨリモ病者ニ於テ一層其甚太クシキヲ見ルヲ以テ病者ニ對スル清潔法ハ常ニ最モ慎重嚴重ニ應用セサルヘカラス。清潔ノ區域ハ空氣、飲品、家屋、寢具、身体、被服、家財、下水、道路、溝渠、井戸、廁所等トス。病室内ノ空氣ハ常ニ清潔ニ保ツヘキヲ以テ屢々窓扉扉戸ヲ開キテ屋外ノ清潔新鮮ナル者ト更新スヘシ室内ノ空氣ヲ汚穢ナラシムル總テノ分泌物、排泄物或ハ炭酸瓦斯等ヲ發生セシムル有毒物質ハ決シテ室内ニ止ムヘカラス。飲食料品ハ必ス一回煮沸セル者ヲ用ユヘシ熟煮スレハ其内部ニ含有スル有機体ハ全ク殺滅セラル、ヲ以テ清潔且ツ安全トナルヘシ其他雜用ニ使用スル井水等モ注意シテ清潔ナルヲ撰ミ混濁ノ者ヲ用ユヘカラス。病室ノ内外ハ屢々洒掃シテ務メテ塵埃ヲ除去スヘシ殊ニ病室内ノ床板、天井、隔壁、戸、器具、寢臺ノ如キ者ハ一日三回以上消毒的ニ可憚ニ拭摩

病室

身体

スヘシ而シテ室隅及寢臺下ノ如キ塵埃ノ堆積シ易キ箇所ハ一層注意スルヲ要ス。清拭後ハ毎回窓扉扉戸ヲ開放シテ自在ニ新鮮ナル空氣ヲ通シ又日光ヲ導キテ充分ニ乾燥セシムヘシ。排泄物及不潔物ハ其都度規定ノ容器中ニ投棄シ密蓋シテ惡臭及汚穢氣ノ飛散ヲ防クヘシ。身体ヲ清潔ニ保タシムルハ殊ニ病者ニ在リテハ一層必要ナリトス何トナレハ皮膚表面ニアル氣孔ハ体内ノ蒸發氣ヲシテ常ニ新陳代謝セシムル機能ヲ營ム者ナレハナリ皮膚ヲ不潔ニスレハ垢脂積シテ其氣孔ヲ閉塞スルヲ以テ健康者ト雖モ之レカ爲メ終ニ疾病ニ犯サル、トアリ。病者ノ身体ハ日々微温湯ヲ海綿其他ノ柔カナル布片ニ浸シ緩ク清拭シ垢脂ヲ去ルヘシ殊ニ傳染性ノ諸分泌物及排泄物ニ由テ汚穢セル部分即チ口腔及肛門、陰部、腋窩等ノ不潔ナル部分若シクハ不潔汚穢シ易キ部分ハ最モ注意ヲ加フヘシ手足ノ爪ハ短剪シ頭髮、耳窩ハ務メテ清



潔ニシ汚穢物ノ残留ヲ防クヘシ。  
患者ニシテ入浴ヲ許可セラレタル者ハ可成的溫暖ナル日ヲ撰ミ少時  
間入浴セシムヘシ注意シテ永ク浴槽中ニ在ルヲ戒ム蓋シ病者ハ身体  
疲弱ナレハ時トシテハ眩暈卒倒スルコトアルヲ以テナリ而シテ其温度  
ノ強弱ハ攝氏三拾八度内外ト定メ決シテ夫レ以上ノ高熱ヲ許スヘカ  
ラス。

### 衣服

衣服ハ白色ノ布ヲ以テ製シタル者ヲ最良トス而シテ其汚染スルト否  
トニ拘ハラズ一週一回以上必ス更換セシメ毎回消毒洗濯シ清潔ナル  
ヲ要ス患者ノ衣服トシテ最モ好適ナル者ハ浴衣ナリ其質輕軟ニシテ  
能ク久シキニ堪ヘ消毒洗濯スルニ亦容易ナリトス輕症者ニシテ離床  
シ或ハ運動ヲ許可セラレタル者ニハ時季ニ應シテ衣服ヲ着セシメサ  
ルヘカラサルモ可成的消毒洗濯ニ適スヘキ者ヲ用ユルヲ可トス故ニ  
單衣ト浴衣ヲ製ネテ着セシムルヲ最モ至便ナリトス。

### 臥褥

臥褥ニハ西洋式寢臺ヲ用ユルヲ最モ便利ナリトスルモ此ノ備ヘナキ  
時ハ厚ク軟カナル藁蒲團ヲ使用スベシ此ノ蒲團ハ白布ヲ以テ藁ヲ覆

被シ凸凹團塊ナキ様注意スベシ。  
器具ハ患者ニ使用セル者ト使用セサル者トヲ別タス毎回能ク消毒的  
ニ清洗シ其質清洗ニ堪ヘサル者ハ叮嚀ニ拭去スヘシ。

### 第二 看護者ニ對スル清潔法

#### 看護者ニ對 スル清潔法

看護者ノ身体ハ白々沐浴シ頭髮ハ梳リテ正シク修束シ散乱セシメサ  
ルコトヲ務ムヘシト雖ヒ之レカ爲メ特ニ油類ヲ多量ニ塗布スルハ反  
リテ宜シカラス指足ノ爪ハ短カク剪去シ汚垢ノ入ルヲ防キ皮膚ヲ清  
洗シテ創傷ヲ受クヘカラス冬期ニ在リテハ手足ノ如キ常ニ寒冷ノ水  
氣ニ觸ルカ爲メ皮膚粗糙トナリ腫脹ヲ生シ易キ部分ニハ消毒藥含  
有ノ華攝林、虞里斯林等ヲ塗布スヘシ。  
被服ハ常ニ消毒洗濯シタル清潔ナル者ヲ用ヒ屢々更新シ其看護ニ從  
事スルニ當リテハ規定ノ看護衣、帽子、足袋ヲ穿ツベシ此ノ制服モ亦一  
週二回乃至數回洗濯シ清潔ナラシムルヲ要ス蒲團ノ類ハ屢々日光ニ  
曝露シ能ク乾燥セシムヘシ。  
居室ハ叮嚀ニ洒掃シテ塵埃ヲ去リ器具ハ清潔ニ保ツヘシ殊ニ飲食器



ニ於テ最モ然リ。

### 第三 隔離法

隔離法

傳染病ナリトノ診斷ヲ受ケタル患者若シクハ其疑ヒアリト診斷セラレタル者ハ可成的速カニ他ノ健康者ト隔離別居セシメ交通ヲ遮斷スヘシ隔離ノ主旨ハ病毒ヲ一所ニ界限シ其傳染蔓延ヲ防禦スルノ方法ナルヲ以テ苟クモ之レニ反スル舉措アルヘカラス八種傳染病ノ如キハ嚴ニ法律ヲ以テ之レヲ規定シ必ラス隔離セシムル者ニシテ患者ハ避病院及ヒ隔離舎ニ收容セラル、ヲ常トス然レモ亦時トシテハ自家ニ在テ隔離法ヲ施行スルヲ得ルコトアリ實扶里亞、奎扶斯ノ如キ疾病ニシテ家屋廣潤清潔ニシテ且ツ能ク病舎ニ適シ消毒機關完備シ他ニ病毒ヲ傳播蔓延セシムルノ慮ナシト認メラル、時ニ於テノミ許可セラル此カル場合ニ於テハ一切健康部ト隔離シ嚴ニ交通ヲ遮斷シ看護者ト雖モ溢リニ他部ト交通スヘカラス。

ニ於テハ看護者ハ一々主治醫及係官ノ指示ニ隨ヒテ動作セサルヘカラス。

患者ハ成ルヘク發病セル室ヲ以テ病室ニ充テ已ムヲ得サル場合ノ外ハ他ニ移轉セシメサルヲ可トス之レ等モ總テ主治醫及係官ノ指揮ニ隨フヘシ。

### 第四 隔離室及避病院

隔離室及避病院

隔離室及避病院ハ土地高燥ニシテ人家稠密ナラサル市外ノ地ニ建設セラル此ノ如キハ完全ナル隔離所ナリ。

隔離室若シクハ避病院ニハ病舎部及健康部ノ區別アリ病舎部内ノ器具、物品及ヒ一切ノ附屬物ハ常ニ健康部ノ物ト全ク隔離シ各室附屬物ハ決シテ他ニ轉移セシムヘカラス又病舎附看護者及病毒汚染物取扱人等ハ決シテ消毒ヲ經スシテ他部ト交通スルコト能ハサル者トス之レ等ハ宜シク各避病舎或ハ隔離舎ニ就テ仔細ニ實地指導ヲ受クルヲ好トス要ハ常ニ隔離ノ性質ヲ辨ヘ其規定ヲ服膺シテ之レニ反セサルニアルノミ若シ患者ノ慰問ヲ爲スカ或ハ他要件ヲ以テ病者ト交通ヲ



乞フ者アル時ハ一々主治醫及係官ノ指揮ヲ受ケ然ル後規定ノ取扱ヒ  
ヲ爲スヘシ其他看護者若シクハ病室附屬人ノ他ニ交通ヲ要スル場合  
ニ於テモ亦前同様ノ手續キヲ盡サシムヘシ。

### 第五 消毒法

#### 消毒法

傳染病者及病毒ノ汚穢物ヲ取扱フ者ハ最モ忠實慎密ニ消毒法ヲ遵守  
スヘシ消毒完全ヲ得ル時ハ傳染ノ患ナキニ遮幾シ。  
傳染病看護ニ從事セシ當初ニ於テハ人々皆其病ノ恐ルベキヲ知ルヲ  
以テ細心翼々希クハ毒牙ニ觸レサラントシ最モ忠實慎密ニ消毒法ヲ  
施行スルヲ以テ比較的傳染スルモノ少シ漸ク懼ル、ニ從ヒ怠慢ノ念  
ヲ生シ往々不注意ニ流ル、ヨリ測ラズ感染ノ災ニ罹ル者アリ之レ大  
ニ服膺スヘキコト、ス。  
病者ニ直接ナルト間接ナルトヲ問ハス苟モ病毒ニ汚穢スル者ト認ム  
ルモノハ一切病室部全般ノ物品ヲ指ス(嚴重ニ規定ニ隨ヒテ消毒法ヲ  
施行スヘシ然ラサレハ之レヲ他ニ運搬シ或ハ使用セシムヘカラス。  
消毒法トハ傳染病毒ヲ殲滅スルノ法方ニシテ之レヲ分チテ理學的消

毒及化學的消毒ノ二トス。  
理學的消毒トシテハ專ラ燒却、煮沸、蒸氣消毒及日光曝露ノ四法ヲ應用  
ス

#### 燒却消毒

〔燒却消毒〕 燒却消毒トハ病毒ニ染浸セル物品ニシテ甚ク汚穢シ  
消毒後再ヒ使用スヘカヲサル者ハ此ノ法ニ由テ燒却スルヲ良トス。

#### 煮沸消毒

〔煮沸消毒〕 煮沸消毒トハ攝氏百度以上ニ煮沸セル湯中ニ入ル、コト  
凡ソ一時間以上ニシテ完全ナル消毒ヲ得ル者トス此ノ法ハ煮沸ニ由  
テ損セサル者即チ衣服、寢具、布片、器物、硝子器、磁器、木製器ノ如キ者ニ應  
用ス又熱湯中ニ五十倍ノ割合ヲ以テ炭酸曹達ヲ投シタル者ハ消毒力  
更ヲニ確實ナリトス。

#### 蒸氣消毒

〔蒸氣消毒〕 蒸氣消毒トハ攝氏百度以上ニ沸騰セル熱蒸氣ヲ通シテ消  
毒スルノ法ニシテ最モ完全ナル方法ナリトス此ノ法ヲ行フニハ一定  
ノ裝置ニ由レル蒸氣消毒機ヲ用ヒ攝氏百度以上ノ熱蒸氣ヲ通スル  
コト一時間以上ナレハ最モ確實ニ消毒ス其ノ大ナル者ニ至リテハ能  
ク疊、蒲團、軍筒等ニ至ルマテ悉皆消毒シ得ル者アリコソホ氏消毒釜ハ



日光曝露消毒

輕便ニシテ最モ完全ノ者ナルヲ以テ汎ク稱用セラル。  
〔日光曝露消毒〕陰濕ニ依テ繁殖スル病毒ヲ日光ニ曝露シテ殺滅スル  
ノ法ニシテ虎列拉、百斯篤ノ如キ病毒ニ對シテハ消毒ノ効アル者トス  
壘、器具等ハ石炭酸水ヲ以テ洗滌シ或ハ拭去シタル後日光ニ曝露セシ  
ムル時ハ最モ良シ又病室内ハ窓扉ヲ開放シ光線ヲ透射セシメ乾燥ス  
ルニ由テ消毒スル者トス。

化學的消毒法

第六 化學的消毒法

化學的消毒法トハ消毒藥品ヲ使用スルノ法ニシテ常ニ使用セラル、  
モノハ

石炭酸水(二十倍)

昇汞水(千倍)

生石灰末

生石灰乳(十倍)

等ナリ。

千倍昇汞水及ヒ二十倍石炭酸水中ニ二百倍ノ割合ヲ以テ鹽酸ヲ加ヘ

石炭酸水

タル者ハ消毒ノ力更ニ偉ナリ。  
化學的消毒法ヲ應用スルノ法ハ左ノ如シ。  
吐瀉物及ヒ諸排泄物ニ就テハ同量ノ石炭酸水ヲ其中ニ投入シ能ク攪  
拌スベシ。

室内ノ壘、戸、障壁、床板、寢臺等ヲ消毒スルニハ同水ニ浸シタル刷子若シ  
クハ布片ヲ以テ拭去スベシ。

手足ヲ消毒スルニハ同水ヲ容器ニ滿タシ之レヲ以テ能ク叮嚀ニ洗滌  
スベシ茲ニ單ニ石炭酸水ト稱スル者ハ二十倍ノモノヲ云フ。

昇汞水ハ千倍ノ溶液トナシ常ニ二百倍ノ割合ヲ以テ鹽酸ヲ加ヘタル  
者ヲ用ユヘシ同藥ハ最モ猛毒ナル者ナレハ飲食器等ノ消毒ニ用ヒタ  
ル後ハ更ニ清水ヲ以テ能ク洗滌スベシ又之レヲ蓄フルニモ最モ危險  
ナレハ色素ニヨリテ着色セシメ一見常水ト別チ易カラシムヘシ昇汞

ハ無色無臭ニシテ其溶解液ハ毫モ清水ト異ルナケレハナリ。  
昇汞ハ又能ク金屬ヲ損シ蛋白質ヲ凝固セシムルモノナレハ鑛製器ニ  
附ヘ又ハ金屬製器具、飲食器、玩具、壘、敷物、障壁、等ヲ消毒スヘカラス若シ



生石灰

クハ吐瀉物、咯痰等總テ蛋白質所含物質ノ消毒或ハ飲料水中ニ滲透シ得ヘキ場所ノ消毒ニ用ユヘカラス。

但シ昇汞一〇瓦ニ付食塩五〇ノ割合ヲ以テ製シタル昇汞中ハ大ニ蛋白質ノ不溶性凝固ヲ防キ得ヘシト云フ。

生石灰ハ粉末トシテ用ヒ或ハ石灰乳トシテ用ユ。

石灰乳ヲ製スルニハ石灰ノ或ル量ニ拾倍ノ水ヲ注キ能ク攪拌シ溶液トナシテ之ヲ用ユ。

最モ多ク使用セラル、糞便、吐瀉物等ノ消毒ニハ其汚物ト同量ノ石灰乳ヲ使用スヘシ。

石灰末

石灰末ハ石灰ヲ粉末トナシテ用ユル者ニシテ専ラ下水、溝渠、塵芥溜其他不潔陰濕ノ場所ニ散布シ混和シテ應用セラル。

此ノ他尙種々ノ消毒藥ヲ用ユルコトアリ近來瓦斯ヲ用ヒテ消毒スルノ法行ハル就中田原氏消毒燈ノ如キハ最モ輕便且ツ完全ナルモノニシテ、フオルムアルデヒート瓦斯ヲ發生セシムルノ裝置ヲ以テ専ラ貴重品及ヒ室内消毒等ニ賞用セラル。

第七 消毒施行法

消毒施行法  
患者排泄物  
ノ消毒

〔患者排泄物ノ消毒〕患者ノ排泄物ハ之ヲ一定ノ容器中ニ投入シ同量ノ石灰乳ヲ注キ能ク攪拌シタル後燒却又ハ煮沸セシメ或ハ更ラニ石灰乳ヲ混シテ一定ノ地ニ深ク埋塞セシム器ハ消毒藥ヲ以テ清洗セル後更ニ石灰乳ヲ注キテ再用ニ適ス。

排泄物ニ由テ汚染セル衣服、蒲團、枕、覆被、看護衣等ハ蒸燻消毒ヲ行フベシ。

排泄物ニ由リ汚染セル布紙片其他ノ汚穢物ニシテ燒却ニ適セル者ハ一定ノ器中ニ收メ之レニ石炭酸水ヲ注キ置キテ然ル後燒却セシムヘシ。

病室ハ一日三回以上石炭酸水或ハ他ノ消毒液ヲ以テ拭去シ戸、障壁、痰臺、器具ノ類モ亦同シク清拭シ乾燥セシムヘシ又屢々床上ニ同液ヲ散注シテ塵埃ノ飛揚ヲ防クベシ。

飲食器消毒

〔飲食器消毒〕飲食器ハ使用後毎回煮沸消毒スベシ藥垢、牛乳垢ノ類モ亦然リ決シテ未消毒ノ儘他ニ持チ去リ或ハ藥局ニ差シ出スヘカラス。



快復患者身  
体消毒

死体消毒

看護者衣服  
ノ消毒

〔快復患者身体消毒〕快復患者ノ身体ハ温昇汞水(五十倍リ)グール水モ亦可ナリヲ以テ頭髮及全身ヲ洗滌シタル後入浴セシメ消毒セル衣服ヲ更着セシメ從前使用ニ供シタル足袋、下駄等ハ使用セシムヘカラス又消毒後ハ再ヒ病室ニ入ラシムヘカラス。

〔死体消毒〕死体ニ就テハ最モ嚴重ナル消毒法ヲ施行スヘシ死後ハ直チニ全身ヲ石炭酸水或ハ昇汞水ヲ以テ拭去シ更ラニ之レニ浸セル布ヲ以テ纏包スヘシ或ハ着衣ニ浸スモ妨ケナシ而シテ藥液ノ乾燥セサル様尙時々灌注スヘシ鼻、口腔、肛門、陰腔、等ノ部ニハ石炭酸水ニ浸セル棉花ヲ充填シ汚液ノ流出ヲ防クヘシ又納棺ニ際シテハ石灰末ヲ用ヒテ其空處ヲ盈タシ必ス火葬セシムヘシ。

〔看護者衣服ノ消毒〕看護者ノ衣服又ハ看護衣ハ屢々蒸熾消毒ヲ施スヘシ若シ排泄物ニ由テ汚染セシ時ハ直チニ貳拾倍ノ石炭酸水或ハ昇汞水ヲ注キ後更ラニ消毒スヘシ。

足袋、下着、帽子等モ洗濯スルニ先チ毎回蒸熾消毒或ハ藥液ノ浸漬ヲ行フヘシ。

看護者身体  
ノ消毒

看護者食器  
ノ消毒

患者及看護  
者書翰ノ消  
毒  
面會者消毒

〔看護者身体ノ消毒〕看護者ニシテ看護終了セシ時ハ頭髮ヲ昇汞水ニテ洗ヒ後チ快復患者ト同様ノ消毒法ヲ行フヘシ患者ノ家族ニシテ附添人タルモノ亦同シ。

看護者ニシテ病室内ニ於ケル諸ノ排泄物又ハ病毒ノ汚染物其他室内ノ物品ニ接觸シタル時ハ手指ヲ石炭酸水或ハ昇汞アルコホルヲ用ヒテ數分間浸漬洗滌スベシ。

晝夜各々交代シテ看護ニ從事スル者ハ必ラス規定ノ消毒セル衣服ヲ着シ帽子、足袋ヲ穿ツヘシ交代後ハ蒸熾消毒ヲ施スヘシ。

〔看護者食器ノ消毒〕看護者ノ食器モ亦使用後煮沸セシムルヲ可トス。飲食ハ決シテ病室ニ於テ爲スヘカラス食時ニハ衣服ヲ更新シ能ク手指ヲ消毒シタル後之レヲ爲スベシ。

〔患者及看護者書翰ノ消毒〕患者及看護者ノ發送スヘキ書翰ハ毎回蒸熾消毒ヲ行ヒタル後發送スベシ。

〔面會者消毒〕面會ヲ許可セラレタル者ニハ一定ノ病室衣及ヒ下駄等ヲ與ヘ其穿チ來レル足袋、帽子、履物ノ類ハ總テ之レヲ脱セシメ且ツ下



醫員病室衣ノ消毒

着ノ衣外ニ虱ハレサル様注意シ然ル後病室ニ導クヘシ止ヲ得サルノ外ハ可成病室内ニ入レシメサルヲ可トス又室内一切ノ物品ニ接觸セシムヘカラス而シテ拾分乃至三拾分時間ニシテ退室ヲ命シ衣服ヲ脱セシメ手指及足部ヲ昇汞水又ハ石炭酸水ヲ以テ洗滌或ハ清拭セシメタル後ニ非サレハ決シテ舊物ヲ着ケシムヘカラス。

〔醫員病室衣ノ消毒〕 醫員病室衣ハ毎回使用後蒸熾消毒ヲ行ヒ置ベシ。其他夏日ハ蚊蠅ノ飛來シテ病毒ヲ運搬シ傳染ヲ媒介スルコトアリ宜シク驅除策ヲ施スヘシ虱蚤ノ類亦然リ。

排泄物ハ此レ等虫類ノ飛來ヲ招ク者ナレハ其容器ニハ必ス密蓋ヲ施スヘシ。

消毒法ニ付テ看護者ノ注意

看護者病室内ニ於テ温度表ニ記事ヲ書載スルニ當リテ鉛筆ノ尖端及筆毛ヲ甜ルヘカラス殊ニ体温ヲ測定シ或ハ脈搏ヲ測定スルノ後ニ於テハ最モ注意スベシ鉛筆ハ其尖端ヲ甜ラサレハ字畫甚タ明瞭ヲ缺クナリテ吾人ハ常ニ之レヲ甜ルノ習慣アリ此カル場合ニ於テモ往々之

レヲ舌上ニ試ム危險ノ最モ甚タシキ者ニ非スヤ此ノ如クニシテ知ラズ識ラズ病毒ニ感染スル者アリ夫レ病毒ノ経路ハ不可思議的ノ鎖事ニ墮テ傳染スル者ナレハ常ニ注意シテ習慣ヲ除却セサルヘカラス。

其他未消毒ナル手指ヲ以テ顔面ニ觸レ或ハ未消毒不潔ナル手巾ヲ以テ顔面ヲ拭フ等ノ如キハ極メテ些細ナルコトナレトモ間々傳染ノ導火トナル者ナレハ最モ注意ヲ要スヘシ。

以上消毒法ハ傳染病毒ニ接スルノ場合ニ於テ行フヘキ者ナレトモ單ニ箇人ノ豫防法トシテハ可成病毒ニ接近セズ自家ノ攝養ヲ重クシテ食物ハ必ス毎回煮熟シテ用ユベシ。

看護者ハ其職務上常ニ病毒ニ近接セサルヘカラス者ナレハ一層注意シテ攝養ヲ成ルヘク感染ヲ免ル、ノ法ヲ講セサルヘカラスナリ故ニ看護ニ從事セント欲スル者ハ其體質ニ於テ感受性ノ少ナキ即チ免疫シタル者ナルヘキコトヲ要ス。

病者ニ觸接スルニハ必ス豫防衣ヲ着シ常ニ清潔ニ保ツヘシ假令ヘ僅カノ汚染タリトモ輕忽ニ付セスシテ直チニ石炭酸水ヲ注キ消毒スヘ



シ。  
 患者ニ接シタル時ハ石炭酸水ヲ以テ手指ヲ洗滌消毒シ爪間ノ汚物ヲ除去スルコトヲ要ス。  
 塵埃ハ僅カノ動搖ニ依テモ飛揚シ又能ク病毒ヲ混スルモノナレバ室内ニ在リテハ時々消毒藥ヲ散布シテ掃除シ夜具、病衣等ヲ整理スルニモ決シテ振盪セスシテ靜カニ空氣ノ流通ヲ完タカラシムヘシ。  
 看護者ノ飲食料ハ必ラス毎回熱蒸セルモノヲ適度ニ用ヒ飽食若クハ腐敗シ又ハ消化シ難キモノヲ避ケ病庭ノ傳播ヲ媒介スル昆蟲類ヲ驅除シ身體ノ健康ヲ保チ時トシテハ免疫ノ法方ヲ受クルコト等ノ諸項ニ注意スヘシ。

第八 八種傳染病者看護ノ概要

八種傳染病ハ何レモ茲微生体ノ發育ニ基キ其毒質ノ血中ニ吸收セラ  
 ル、ニ由リテ發スル中毒ノ結果ニ外ナラス而シテ熱發ハ殆ンド其通  
 性ナルカ如シ此レカ看護法トシテノ主旨ハ熱性病者ニ對スルト同様  
 ナル取扱ヒヲ爲スヘシ。

八種傳染病者看護ノ概要

身体安靜法

〔**身・体・安・靜・法**〕患者ハ成ルベク閑靜ニシテ清楚且ツ整頓セル病室内ニ就褥セシムベシ而シテ一般ニ患者ハ疲勞ヲ覺ヘ身体倦怠シテ就褥ヲ好ム者ナレトモ輕症者ニ在テハ往々自カラ歩行談笑ヲ試ミント欲スル者アリ或ハ熱發ノ爲メニ譚語シ精神恍惚トシテ人事不省ナルモノ噪狂暴怒スル者苦悶ニ堪ヘスヲ禱外ニ滑轉スル者アルニ至ル之レ等ハ安靜ナラシムルコト最モ難事ナリト雖モ是レ皆病ノ爲メニ一時其天性ヲ奪ハレタルコト依ル者ナレハ注意シテ自他ヲ創傷セサラシメ成ルヘク之レヲ抑制シ努メテ安靜ナラシムヘシ仮令ヘ輕症者ト雖モ自己ノ獨斷ヲ以テ離床セシムヘカラス然ラサレハ問々之カ爲メ疾病ヲ増悪ナラシメ或ハ危險ナル症候ヲ誘起セシムルノ因トナルコトアレハナリ。

精神安靜法

〔**精・神・安・靜・法**〕患者ハ身體ノミナラス精神モ亦安靜ニ保護スヘキ者ニシテ精神ノ激動ハ疾病ニ大ナル影響ヲ及ホス者ナリ殊ニ神經質ノ患者ニ在テハ些少ノ事ニモ体温ヲ上昇セシメ大害ヲ惹起セシムル者ナリ概シテ患者ハ一般ニ神經過敏トナルコト多ケレハ注意シテ決シテ



精神ヲ刺戟スル如キ材料ヲ與フヘカラス患者教育ノ程度ニ由ルト雖  
 成ルヘク一般ニ感情ノ刺戟トナルコト即チ慘憺聞クニ忍ヒサルモノ  
 或ハ忿恚極リナキモノ等總ヘテ同情ヲ發揮セシムル如キ談話ヲ爲ス  
 ナシケサルヘカラス其他悲劇小説新聞ノ如キモノハ大ニ感情ヲ動カ  
 スヘキモノナレハ讀マシメサルヲ良トス又親子兄弟等ノ面會ヲ求ム  
 ル者ニ對シテハ豫メ注意シテ家事ノ煩累ヲ聞カシメサルヲ可トス。  
 看護者室内ニ在テハ靜肅ヲ守リ決シテ粗暴野鄙ノ舉動及ヒ高談放言  
 私語ヲ爲スヘカラス。

体温脈搏及呼吸測定法

測定ノ心得

〔体温脈搏及呼吸測定法〕 体温脈搏及呼吸ヲ測定スルハ何レノ疾病タ  
 ルトヲ論セス治療上最モ緊要ナル者ナレトモ傳染性及熱病者ニ對シ  
 テハ更ラニ一層必要ニシテ實ニ醫師カ治療ノ羅針盤タリ治療ノ法針  
 モ亦之レニ由テ定マルモノニシテ殊ニ其如何ハ能ク疾病ノ危險ヲ豫  
 報セシムルモノナレハ看護者ハ正確ニ測定シ且ツ毎回溫度表中ニ明  
 瞭ニ記入スベシ。  
 一般平病者ニ在テハ一日二回朝夕ニ測定スルヲ以テ足ルト雖トモ熱

及意注

性病者ニ對シテハ一日四回乃チ毎六時間或ハ毎三時間ニ測定セサル  
 ヘカサルコトアリ之レ醫師ノ命スル處ニ隨フモノニシテ或ル患者ハ時  
 ニ劇カニ頭痛ヲ發シ皮膚灼熱ヲ訴ヘ發熱スルコトアルモノナレハ  
 斯カル場合ニハ臨時ニ檢温スルヲ要ス之レ疾病ノ再發或ハ増進ヲ示  
 スモノナレハナリ熱性病殊ニ腸窒扶斯患者ニ在テハ常ニ体温上昇シ  
 テ四十度乃至四十一度ニ及ブコトアリ体温ノ上昇ニ伴フテ脈搏及呼吸  
 モ亦其數ヲ増加スルハ生理的機能ノ亢進ニ伴フ一般ノ經過ナレトモ  
 時ニ或ハ体温著ルシク下降シ脈搏ノ甚ク増加スルモノアリ之レ  
 頻死ノ患者ニ就テ屢々現ハル、現象ニシテ即チ脈搏ノ増加ハ心臟機  
 能ノ亢進ヲ示シ薄弱ナルハ心臟ノ衰弱ヲ示ス故ニ溫度表ニ記入セル  
 後ハ毎回畫線シテ之レヲ連結シ一見シテ經過ノ判別ヲ容易ナラシム  
 ヘシ体温ハ各病床ニ由テ特殊ノ定型ヲ造ルモノナリ故ニ醫師ノ診斷  
 時ニハ必ラス之レヲ示シ其參考ニ供スヘキモノナリ。  
 健康者平素ノ体温ハ攝氏三十六度乃至七度ノ間ニアリテ脈搏ハ一分  
 間六十五乃至七十二トス



体温ノ昇騰時ハ常ニ全身ノ違和ヲ來シ頭痛、惡寒、戰慄等ヲ覺ヘ亞ヒテ熱度上昇シ皮膚灼熱シ顔面潮紅シ口唇及舌ハ乾燥シ全身倦怠疲勞ヲ覺ヘ食慾飲乏シ脈搏及呼吸ノ増加促進スルモノニシテ此ノ時檢温器ヲ用ヒテ測定スレハ必ス体温ノ昇騰ヲ見ルヘシ。

看護者ハ患者ニ對シ常ニ表ハル、現象ニ注意シ精密ニ觀察スルハ最も必要ニシテ体温ノ上昇セルニモ拘ハラズ或ル疾病ノ如キハ何等ノ望診的異狀ヲモ呈セサルモノアリ之レ等ハ通常慢性ノ疾病ニ於テ見ル處ナレトモ亦看護者自家ノ經驗熟練ニ由テ多少之レヲ鑑識スルニ至ルヲ要ス。

熱ノ定型ニ由テ種々ナル區別アリ体温朝夕ニ於テ昇騰ノ差一度乃至二度ニ及フモノハ之レヲ弛張ト云ヒ高キニ止マルモノヲ稽留ト云ヒ時ヲ定メテ昇降スルモノヲ間歇熱ト云ヒ一時昇騰シテ數日ノ後チ下降シ更ラニ數日ノ後チ再ヒ上昇シテ前經過ヲ反覆スルモノヲ回期熱ト云フ之レ等ハ病症各自ノ特有經過ヲ示スモノナルカ故ニ後篇各病症ノ看護法中經過ノ項ヲ參照スベシ。

患者ノ飲食物ハ最も注意シテ品質ヲ撰擇セサルヘカラス單ニ健康時ノ嗜好品ヲ以テ満足スヘキモノニアラス。

健康者ニ於テモ飲食物ハ生命保全上ノ主眼ナレトモ病者ニ對シテハ更ラニ一層重大ナルモノニシテ患者ハ健康者ニ較ラレハ一層体力ノ消耗甚クシク病的ノ變化ニ由テ生理的ノ機能ヲ阻害セラル、モノニシテ體質甚太シク體弱シ羸瘦骨ヲ露ハシ貧血シテ顔面蒼白色ヲ呈スルハ常ニ重症者或ハ慢性病者ノ末期營養不良ナルモノニ於テ多ク見ル處ナリ。

完全ナル醫療ヲ施スモ体力漸次消耗スル時ハ疾病ニ抵抗シテ永キ經過ヲ支フルコト能ハス終ニハ虛脱ニ陥リ死亡スルニ至ルベシ一ニ介抱ニニ藥ト云ヘル諺ハ真ニ看護法ノ要約ニ適フト謂フヘシ如何ニ博學ナル醫師ガ如何ニ良好ナル藥品ヲ投スルトモ看護其當ヲ得サレハ尙火ヲ消ズニ油ヲ以テスルカ如ク從テ投スレハ從テ然ヘ究局消ユルノ期ナシ看護者ノ任モ豈亦重大ナラストセンヤ。

健康者ニ在テハ固形ノ不消化物モ運動ナル輔翼ニ由リテ消化シ能ク



血液中ニ吸收セラル、モノナレトモ病者ニ在テハ容易ク消化セサル  
 ノミナラス却テ大ヒニ消化器ヲ損傷セシムルモノナリ故ニ看護者ハ  
 日常病者ニ對シテ消化シ易ク且ツ疾病ニ抗抵シ經過ニ堪ヘ得ルノ体  
 力ヲ維持セシメンカ爲メ滋養成分ニ富メル物質ヲ擇ヒ且ツ巧ミニ調  
 理シテ與フヘシ。

飲料水ハ患者ト否ラサル者トナ別タス生存上最モ必要ナルモノナレ  
 且殊ニ熱性的病者ニ在テハ口喉連リニ渴ヲ訴フルヲ以テ冷水ヲ望ム  
 事甚タシ清潔ニシテ有機体ヲ含有セサル氷又ハ水ハ之レヲ供給スル  
 モ元ヨリ害ナシト雖モ良好ナル水ハ容易ニ得易カラサルモノナレハ  
 必ス毎回一度煮沸シテ冷却セシメタルモノヲ用ユヘシ之ヲ冷湯ト云  
 フ冷湯ハ何レノ患者ニ與フルモ些ノ害アルコトナシ其他飲料水ニ代フ  
 ルニ種々ナル清涼劑ヲ配合シ清涼止渴ノ目的ヲ以テ與ヘラル、モノ  
 アリ鹽酸里母奈珪、沸騰散ノ如キモノ此レナリ。

酒精分飲料

酒精分ヲ含有シタル飲料品ヲ用ユルハ最モ有益ニシテ体力ノ消耗ヲ  
 補ヒ且ツ生理的機能ヲ鼓舞スルモノナリ通常多ク用ヒラル、モノハ

葡萄酒 一名 赤酒

ホルト酒

フランソー 一名 武酒

ノ類ニシテ或ハ尙之レ等ヨリモ強性ノモノヲ用ユルコトアリ之レ等  
 ハ徒ラニ酩酊ヲ望ムモノニアラス又爽快ヲ與ヘンガ爲メニモアラス  
 治療ノ目的トシテ與フルモノナレハ濫リニ多量ヲ服セシムヘカラス  
 如上ノ酒類モ冷湯ニ稀釋ナラシメ與フルヲ可トス宜ク醫師ノ命令  
 ニ從フヘシ。

滋養食料

食料中最モ患者ニ適切ナルハ牛乳、「スープ」、鶏卵、肉醬等ニシテ之レ等ハ  
 固ヨリ流動性ノモノナルカ故ニ消化最モ良ク且ツ速カニ吸收セラル  
 、モノナリ牛乳ハ毎回煮沸殺菌セルモノヲ用ユヘシ牛乳中ニハ往々  
 病原的細菌ヲ含有スルコトアリ殊ニ結核菌ヲ牛乳ニ由テ傳播セラレ  
 タルノ例尠ナカラス一日ノ量數合以上ヲ用ユル時ハ充分ナル滋養力  
 ナ有ス。

「スープ」ハ牛肉ヲ細挫シ重湯煮ヲ以テ製シタルモノヲ用ユルヲ可ト



滑粘飲料

ス。  
 鶏卵ハ生ニテ用ヒ或ハ半熟トナシテ用ユルモ可ナリ去レト全ク熟煮  
 シ凝固シタルモノハ消化シ易カラサルヲ以テ用ヒシムヘカラス。  
 肉醬ハ大衰弱患者ニ用ユル處ノ最モ張力ナル滋養品ナリ。  
 快復期患者ノ食料トシテハ稍ヤ形状ヲ有スルモノヲ與フルコトヲ得  
 ヘシ即チ通常煮熟セル米粥、半熟鶏卵、軟カナル肉類(魚鳥)麥粉製麵麩等  
 ナ用ユ然レモ疾病ニ由テハ分量ニ制限ヲ加フル事アリ或ハ性質ノ研  
 究撰擇ヲ爲スニアラザレバ與フヘカラサルモノアリ宜シク後篇各病  
 症飲食料ノ項ヲ參照スヘシ。  
 患者ニ由テハ殊ニ滑粘ナル飲料ヲ必要トナスモノアリ之レ腸ノ喘動  
 機能ヲ鎮靜セシムルノ作用ヲ有スルモノニシテ多ク下痢即チ赤痢、虎  
 列拉患者等ニ應用セラル即チ大麥羹汁、米粥汁、葛湯等ノ類之レナリ。  
 此ノ他疾病ニ由リ口腔ヨリ食物ヲ攝取スルコト能ハサルモノアリ或  
 ハ食思全ク失損スルモノアリ或ハ嚥下作用ヲ營ムコト能ハサルモノ  
 アリ此場合ニ於テハ止ヲ得ス流腸法ヲ用ヒテ直チニ腸内ニ注入シ永

血清療法ノ大意及看護者ノ注意

ク止マラシメテ吸收セシムルコトアリ之レニ用ヒラル、モノハ牛乳  
 鶏卵ニシテ滋養流腸料トシテ處法セラル配スルニ血温ニ温メラレタ  
 ル興奮性酒類ヲ以テシ深ク腸内ニ流注スヘシ。

第九

血清療法ノ大意及看護者ノ注意

近來細菌學的療法ノ進歩ニ伴ヒ傳染病患者ノ治療法トシテ斯法ヲ施  
 スコト最モ盛ニ行ハレ且ツ其ク奏効ス血清療法ト稱シテ屢々應用  
 セラル、處ノモノナリ。

血清

血清トハ細菌毒素ヲ動物体(山羊、綿羊、馬、牛、兔、モルモット等)ノ皮下ニ接  
 種注入シ漸ク多量ノ毒質ヲ接種注入シテ遂ニ人工的ニ免疫質トナラ  
 シメタル動物ノ血液中ヨリ搾取シタル血清ニシテ此ノ注入ニ由レハ

血清ノ接種

傳染病患者ノ經過ヲシテ佳良且ツ迅速ナラシム。  
 血清ハ内服トシテ用ヒラル、コト幾ント稀ニシテ常ニ皮下注射トシ  
 テ施行セラル、モノナリ。  
 傳染病ノ豫防法トシテ健康体ニ免疫血清ヲ接種シ人工的ニ免疫質ヲ  
 附與シテ感染ヲ豫防スルコトヲ得ヘシ此ノ目的ヲ以テ看護者及病毒



ニ接近セサルヘカヲサルモノニ施シ或ハ傳染病ノ大ヒニ流行スル時  
 ニ際シ一般豫防ノ目的トシテ種痘ノ如ク施行スルコトアリ輒近大阪  
 地方ニ於ケル「ペスト」病豫防接種ノ如シ。  
 血清ヲ取リ扱フニハ總テ滅菌的ノ取扱ヒヲ要スルハ勿論又之レヲ替  
 フルニモ氷室ノ如キ温暖ナラサル冷暗所ニ蓄藏スヘシ。  
 注射用トシテハ血清注射器及ヒ時トシテ「アブラワッツ」氏皮下注射器  
 ナ用ニ血清注射器ハ其内容五立方仙迷突、十立方仙迷突、二十立方仙迷  
 突及ヒ尙其レ以上ノモノ等種々アリ宜シク注射量ノ多寡ニ應シテ準  
 備スヘキモノトス。  
 注射器ハ5%石炭酸水或ハ50%アルコホル「チ」ヲ以テ吸引排出ヲ數回  
 行ヒタル後チ更ラニ0.5%石炭酸水ヲ以テ同法ヲ繰リ返シ使用後ハ  
 0.5%石炭酸水ヲ以テ以テ再ヒ吸引排出セシメタル後5%石炭酸水  
 又ハ50%アルコホル「チ」ヲ以テ同法ヲ行フヘシ然ラサレハ器中ニ殘留  
 スル血清ニ由リ水色ノ涸濁ヲ起シ時トシテハ凝固シテ鍼孔ヲ閉塞ス  
 ルコトアリ。

注射部ノ皮膚ハ清潔ニ洗拭セル後チ「アルコホル」ガ「セ」或ハ「アルコ  
 ホール」綿「チ」以テ充分摩擦消毒スヘシ部位ハ醫師ノ定ムル所ニヨルモ  
 概ネ季肋部、腹側、内服、胸部、鎖骨下窩等ニシテ注射後鍼孔ニ沃度ホルム  
 コロ「シ」ニ「ム」或ハ單ニ「コロ」ニ「ム」絆創膏等ヲ用ヒテ内容液ノ滲出  
 ナ防キ又ハ外部ヨリ他物ノ侵入スルヲ防キ皮膚ノ隆起セルモノハ摩  
 擦或ハ壓迫スルコトナク自然的ニ吸收セシムヘシ通常數分時ノ後全  
 ク吸收セラル、モノニシテ後チ數時間ハ局所ノ疼痛ヲ訴フルモノ自然  
 ニ消失スルモノナリ。  
 殊ニ注意ス可キハ看護者ニシテ注射器ヲ取扱フニ際シ充分ナル消毒  
 ナ爲シ置カサレハ爲メニ局所ノ炎症ヲ起シ發熱化膿スルモノナレハ  
 嚴重ノ消毒ヲ要スルコト尙外科手術ノ場合ト同シク毫モ異ナルコト  
 ナシ豫防接種モ亦之レト同シ少量ヲ注射スルニ過キス。  
 血清注射ヲ行ヒタル患者ニ就テハ局所ノ異狀及ヒ全經過ニ變動ヲ來  
 スコトアリ又豫防接種ヲ行ヒタル者ニハ全身及局所ニ著ルシキ反應  
 ナ呈スルコトアリ注意シテ精密ニ觀察シタル後チ詳ラカニ醫師ニ報



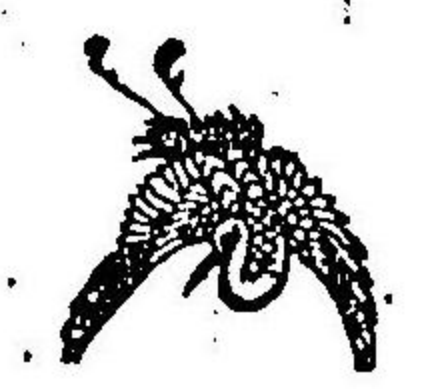
告スヘシ又注入ノ量及時日等ハ温度表中ノ記事欄ニ記入スヘシ。  
 傳染病患者ノ細菌試驗物トシテ諸排泄物、分泌物、汚物等ノ保存及ヒ試  
 驗所ニ此レカ送附方ヲ命セラル、トアリ即チ肺結核患者ノ咯痰、腸空  
 扶斯、赤痢、虎列拉患者ノ糞便、百斯篤患者ノ尿刺液、實扶的里亞、肺百斯篤  
 患者ノ咯痰及義膜等ノ如シ病毒混在ノ分泌、排泄物ハ顯微鏡試驗或ハ  
 培養試驗ヲ行フノ目的ニシテ之レ等ハ實ニ細菌ノ淵源病毒ノ巢窟ナ  
 レハ之レヲ取扱フニハ慎重注意シテ最モ町重ニセサレハ危險測ルヘ  
 カラス。  
 容器トシテハ硝子製ノ覆蓋附(シヤイレ)ヲ用ユルコト多ク或ル場合ニ  
 依リテハ皿、「コップ」等ノ類ヲ代用スルコトアリ此レ等ノ器物ハ毎回  
 清潔ニ消毒セルモノヲ用ヒテ發散ヲ防クコト必要ナリ故ニ完全ニ消  
 毒ヲ施シタル「シヤイレ」ヲ用ユル法トス然ラサレハ往々他種ノ雜菌  
 ナ混入シ試驗時ニ於テ鏡檢者ノ勞苦ヲ増サシムルモノナリ又培養試  
 驗ニ供スルモノハ細菌ヲ生存ノ儘マ保存シタルモノナラサルヘカラ  
 ス然ラサレハ發育セサルモノトス器中ニ投シタル後ハ密蓋シ直チニ

送附スヘシ。

夏日赤痢、虎列刺ノ糞便ヲ硝子器中ニ入レ其儘ニ忘却シテ數日間ニ亘  
 リ又ハ知ラスシテ之レヲ日光ノ直射セシ處ニ放置シ或ハ火爐ノ近傍  
 ニ置ク等ハ最モ注意セサルヘカラサルコトナリ。  
 之レ等ノ注意足ラサル時ハ往々醫師ヲシテ其研究ノ時機ヲ失セシム  
 ルモノナリ。  
 又傳染病患者ノ血液ヲ採取シ試驗ニ供セラル、コトアリ即チ腸空扶  
 斯患者ニ於ケル凝聚反應檢査ノ如シ或ハ血液ヲ用ヒスシテ發泡法ヲ  
 用ヒ其内容液ヲ用ユルコトアリ。  
 血液採取ヲ爲スニハ皮下注射器ヲ用ヒテ靜脈ヲ穿刺スルコトアリ或  
 ハ皮膚ヲ鍼破シ採收セラル、コトアリ之レニ用ユル器械及試驗管等  
 ハ血清注射ノ項ニ於テ述ヘタル如ク總テ滅菌的ノ取扱ヒヲ爲スヲ要  
 スルモノナリ。  
 局所皮膚ノ消毒モ亦同シ採收後ハ防腐綑帶ヲ施シ或ハ絆創膏ヲ以テ  
 創口ヲ密閉スヘシ。



血液及水泡液ハ消毒試験管内ニ收メタルマ、封シテ試験所へ送附ス  
ヘシ此ノ時病名、姓名、年齢、採取年月日時、發病後經過ノ日數ヲ紙片ニ書  
シ之レト同時ニ送ルベシ。



八種傳染病看護法前篇終



醫術開業  
試驗委員 醫學士 白江規矩三郎君校閱  
日本赤十字社準備看護婦 油川太嘉著

# 八種傳染病看護法

後編

著者藏版



# 腸室扶斯病者看護法

## 第一 發生及傳染經路

腸室扶斯

腸室扶斯ハ八種傳染病中常ニ最モ多ク見ル處ノ疾病ニシテ處々ニ散  
發シ或ハ時ニ流行傳播スルコトアリ。

其發生流行ノ時期ハ一定セザルモ秋季ヨリ冬ニ亘リテ最モ多シトス

本病ハ概シテ壯年者(十五歲以上三十歲以下)ノ疾患ナルモ稀ニハ小兒

老人ト雖トモ之レニ罹ルコトナキニアラス而シテ一ト度ヒ本症ヲ經

過セシ者ハ再ヒ病毒ヲ感受スルコト誠ニ渺ナシ。

〔病毒〕腸室扶斯病毒ハ患者ノ糞便中ニ混在シ直接或ハ間接ニ傳染ス

ルモノニシテ其ノ傳染經路ハ口腔ヨリ消化器内ニ入り腸ニ至リテ發

育シ毒質ノ吸收ニ由テ發病スルモノナリ。

〔潜伏期〕潜伏期ハ時ニ遲速ノ差アレモ平均十日乃至二週間トス。

〔前驅症〕頭重及ヒ頭痛、四肢ノ倦怠、筋ノ倦痛、不眠等ニシテ食思欠乏シ

作業ヲ厭ヒ精神不快ニシテ活潑ナラサルモ尙就醫スルニ至テス數日

前驅症

病毒



症候

ヲ經過スル時ハ劇シク惡寒ヲ戰慄ニ亞キテ發熱シ体温上昇シテ終ニ就褥スルニ至ルヘシ然レトモ時トシテハ全ク此種驅症ヲ意ニ介セスシテ經過シ急ニ惡寒戰慄シ以テ熱症候ヲ呈スルコトアリ。

〔症候〕本症熱ノ經過ハ通常三週乃至四週間ニシテ消失恢復スルモノニシテ一種ノ熱定型ヲ爲スモノナリ脈搏呼吸モ生理的機能ノ興進ニ由テ増加スルモノナレトモ本症ニ在テハ体温ニ比較シ脈搏ハ常ニ少ナク体温四十度以上ニ達スルモ脈搏ハ通常八九十乃至一百ニ過キス之レ本症ノ特徴ナリ。

然レトモ重症者或ハ惡性ニシテ合併症ヲ發スルモノニ在テハ間々本經過ノ他更ラニ永キ時日ヲ要スルモノナリ又體質虛弱、營養不具ナル者ハ此重症熱經過ニ堪ユルコト能ハスシテ死亡スルカ或ハ他合併症ニ由テ死亡スルニ至ル。

〔第一週〕第一週ハ本症ノ増進期ニシテ初メ惡寒戰慄ヲ以テ發熱シ顔面潮紅シ皮膚灼熱、強頭痛又ハ眩暈シ舌苔ヲ蒙リ乾燥、振顫シ食慾欠乏、不眠苦惱ノ狀ニシテ疲勞増加シ渴強ク体温ハ日ヲ逐フテ一度乃至一

第一週

度半ノ弛張ヲ爲シ、漸々上昇シ四五日ノ後チニ至レハ三十九度乃至其以上ニ達シ尿ハ濃厚ニシテ少量トナリ腹部膨滿シテ下痢シ或ハ却ツテ便秘スルモノアリ一週ノ終リニ至リ胸腹部ニ紅色ノ蕁麻疹ヲ散散ス。

第二週

〔第二週〕本症ノ極期ニシテ諸症狀ノ完備スル時ナリ即チ前週間内ノ諸症候ヲ持續シ、益々増進シ体温高ク稽留シ顔面蒼白色ニシテ精神恍惚トナリ舌及口唇ノ乾燥強ク龜裂シ舌振顫シテ言語澁滯シ時々睡眠譫語ス。

重症者ニ在テハ精神全ク涸濁シテ絶ヘス躁狂譫語シ稍モスレハ褥外ニ滑轉シ或ハ不意ニ起立シテ室外ニ逸奔セントシ危險名狀スベカラス櫻空摸床スルアリ嚔下困難ニ或ハ尿ヲ失禁シ腹部膨滿シテ下痢シ痔瘡、腸出血及其他ノ合併症ヲ發スルコトアリ。

第三週

〔第三週〕輕症及中度ノモノハ強發汗ヲ以テ急ニ下熱(即チ分利ト名ケ從テ脈數モ大ニ減少ス)シ或ハ熱度漸々下降シ、終リニ弛張ヲ爲シ始メテ平温トナリ舌苔去リ乾燥渴ナク譫語ナク精神明瞭トナリ腹部



第四週

ノ膨滿去リ下痢ナク便秘シ皮膚枯燥貧血甚ク全身羸瘦シテ熟睡シ食機稍ヤ振ヒ漸々佳候ヲ呈シテ徐々ニ恢復期ニ赴ク。重症者ニ在テハ尙依然トシテ前週間ノ諸症狀ヲ持續シ或ハ増進シ体温高ク稽留スルカ或ハ不規則トナリ脈搏微弱ニシテ嘔吐シ時々睡眠スルコトアレトモ安靜ナラス舌及齒間ニハ煤色ノ不潔物ヲ附着シ乾燥龜裂シテ出血シ噪狂甚ク食慾全ク欠損シ褥瘡及腸出血ヲ起シ或ハ心臟痙攣ニ由テ死亡シ或ハ幸ニ五六週間ノ後全治スルモノナリ

〔第四週〕輕症患者ニ在テハ快復期ニシテ体温ハ常溫下ニ降り前週過ノ諸症狀ハ消失シ衰弱甚クシク食機振ヒ食慾興進シテ空腹ニ堪ヘ難ク過敏ニシテ情思ノ感動モ能ク体温ヲ昇騰セシメ過食ニ由テ往々再發ヲ招クコトアリ又毛髮ハ漸次脱落スレトモ數月ノ後チ再ヒ發生スルモノナリ。

再發ハ体温下降後數日ニシテ急ニ体温上昇スルモノナレトモ本症狀ニ比シ輕キ經過ヲ以テ治スルモノナリ過食精神ノ感動離床ノ早過等ハ再發ノ原因トナルモノナリ。

合併症

腸出血

腸穿孔

〔合併症〕本病經過中合併スル疾病ハ褥瘡、腸出血、腸穿孔、肺炎、氣管支炎、耳下腺炎等ナリ。

〔腸出血〕第二週ノ終リ或ハ第三週ノ初メニ來ル最モ危險ナル合併症ニシテ往々死亡ニ至ルコトアリ其徵候ハ腹部ノ膨滿及雷鳴、過敏、疼痛、下痢等ニシテ体温急ニ下降シ顔面蒼白貧血シ脈搏微弱トナリ四肢欠冷シ虛脱ニ陥リ或ハ少量ニシテ止ム時ハ甚ク虚脱ノ狀ヲ呈セサルコトアリ出血後直チニ排泄セルモノハ流動シテ血色ヲ呈シ暫時ノ後排泄セラル、モノハ褐色暗黑色ニシテ凝固スルコトアリ。

故ニ看護者ハ前記ノ症狀ヲ有スルモノ及出血スル時ハ直チニ應急ノ手當ヲ施シ且ツ速カニ醫師ニ報スヘシ。

〔腸穿孔〕本症ハ稀ナルモ合併症ノ一ニシテ腸内ノ潰瘍腹腔内ニ穿孔スルノ症ヲ云フ其症狀ハ卒然烈シキ腹痛ヲ發シ貧血甚クシテ全身ノ皮膚蒼白色トナリ四肢欠冷シ体温下降脈搏微弱トナリ腹部膨滿シテ嘔吐シ尿閉便秘等アリ終ニ虚脱ニ陥リ死亡スルモノナリ。

第二

看護法



本病ハ最モ重症ナル傳染熱性全身病ニシテ經過永ク其間ニ於ケル諸  
 症狀及合併症ノ如キハ本病ニ重要ナル經過ノ現象ナレハ看護者ハ極  
 メテ周到ナル介抱、鋭敏ナル觀察及ヒ適應ノ處置ヲ要スルコト最モ切  
 ニシテ其看護ノ適否カ如何ニ病症上ニ至大ナル利害ヲ及ホスヘキカ  
 ハ普ク一般ニ了解セラル、處ニシテ輕易ニ經過スヘキ疾患モ看護  
 其法ヲ得サレハ重症ニ變シ爲メニ挽回スルノ道ナキニ至ルヘク之レ  
 ニ反シテ看護其宜キニ適セハ重症ニシテ醫士ノ望ミヲ絶チタル者モ  
 亦能ク快復セシムルヲ得タルノ例ハ實ニ枚擧ニ遑アラサルナリ。  
 看護法ノ醫療上ニ重キヲ置カル、ハ蓋シ一般ノ狀態ニシテ兩々相待  
 ヲコト恰カモ車ノ兩輪ニ於ケルカ如シト雖トモ恐ラクハ本病ニ於ケ  
 ル程至大ノ利害ヲ及ホス疾病ハ決シテ他ニナカルヘシ故ニ醫師ニ於  
 テモ此レカ看護ニハ最モ意ヲ傾ケ常ニ老練敏捷ニシテ注意周密、介抱  
 懇切ナル看護者ヲ望ム所以ナリトス。  
 看護學中ニ於テハ本病ノ看護法ヲ以テ百般看護ノ模範トナセリ之レ  
 其ノ初メニ於テ述ヘタルカ加ク斯ノ病タルヤ管ニ全身ノ至重ナル熱

性病ナルノミナラス殆ソト全般ノ合併症狀ヲ具備セルモノナレハナ  
 リ故ニ八種傳染病モ亦本法ヲ以テ模範トナシ他ハ皆各自ノ經驗ト學  
 識トニ由リテ斟酌應用シ更ニ特異ノ箇處ニ付テノミ新クナル技術ヲ  
 要スルニ過キス著者ノ本法ヲ以テ八種傳染病看護法ノ劈頭第一ニ掲  
 クル者洵ニ所以アリト爲ス日新ノ今日希クハ讀者モ亦幸ニ各其學フ  
 處ニ由リテ研鑽シ欠ヲ補ヒ遺ヲ充タサハ自他ノ利益蓋シ尠少ニ非サ  
 ルナリ其他ノ傳染病ニ就テハ各自固有ノ特徴点ノミヲ記シ之レカ應  
 用ヲ講セリ。  
 病源ハ直接或ハ間接ニ傳染スルノ疾病ナレハ患者ハ直チニ避病院又  
 ハ隔離舍其他ノ病院或ハ時トシテハ自家ニ於テ充分ナル隔離法ヲ行  
 ヒ嚴ニ交通ヲ禁止スヘシ。  
 〔箇人的豫防法〕トシテハ前篇記載ノ各要項ニ基キ各自攝生ヲ重シ  
 健康ヲ害スルコトナク又感染ノ誘因タルベキコトハ思慮シテ一切除  
 却セサルヘカラス。  
 〔消毒〕消毒及其汚染物即チ下泄物ハ注意シテ充分ナル消毒法ヲ行フ



注意

ヘシ又病室内一切ノ器物、被服等ハ患者ニ直接スルト否トニ論ナク總  
 ヘテ消毒施行ノ要項ニ隨ヒ夫レ々々消毒法ヲ行フヘキモノナリ看護  
 者ノ之レ等物品ニ接觸シ或ハ患者ニ觸接シタル時ハ毎回充分ニ洗手  
 消毒法ヲ行フヘシ。

〔注意〕 腸窒扶斯ハ最モ屢々發生スル疾病ナルカ故ニ吾人ノ觀念モ殆  
 ソト之レヲ平病視スルニ至リ居レトモ之レ誤マレルノ大ナル者ニシ  
 テ最モ危険ナリト謂フヘシ之レヲ看護者中ニ徵スルニ輕視ニ由リテ  
 斯病ニ感染セシ者其數許多アリト云フ當業者尙且ツ然リ況ンヤ世間  
 一般ノ觀想ノ自然侮慢ニ失スルハ亦無理ナラヌコトト云フヘシ盟ツ  
 テ注意ヲ怠ラス他人ヲ戒メ自己ヲ警メ周密ニシテ慎重ナル消毒ヲ爲  
 スユアラサレハ終ニハ病苦ニ犯サレ人ノ笑ヒヲ招クコトアリ總ヘテ  
 傳染病看護ノ秘訣ハ全ク古聖ノ金言ト相反シ過キタルハ尙及フニ近  
 シト云フヘシ。

如上ノ注意ヲ以テ患者ニ接シ此クシテ尙感染スルモノハ即チ所謂天  
 藥ニシテ其不幸ハ誠ニ悲ムヘキモ其人ノ運命ハ終ニ此クナラサルヘ

病室

カヲギル因縁ト爲シ甘シシテ天命ニ委セ其職ニ與カル者ニ在テハ寧  
 ロ己レノ任務ヲ完フシタルコト喜フベシ。

〔病室〕 温暖ニ過シルハ反ツテ害アリ通常華氏五十度トナシ寢具其他  
 ナ清潔、整頓シ空氣ノ流通ヲ促カシ頭部、顔面ニ光線ノ直射スルモノハ  
 帷幄ヲ以テ之レヲ遮ルヘシ。

寢處

〔寢處〕 最モ注意ヲ要ス凹凸不整ニシテ處々ニ硬キ塊團アルモノ或ハ  
 内部ノ蒸濕潤セルモノ等ハ最モ害アリ凸凹ナルカ爲メニ患者ノ身体  
 ニ疼痛ヲ感セシメ又能ク褥瘡ヲ發スルノ患ヘアレハナリ。

蒲團

〔蒲團〕 蒲團ニ於テモ亦然リ内部綿ノ一部ニ集團シテ一部ニ薄疎ナル  
 アリ或ハ「トヤ糸」ノ結部塊リヲ爲セルモノ縫合部ノ隆起セル者等ハ皆  
 患者ヲ苦シマシムルモノナリ。

病衣

〔病衣〕 浴衣ヲ用ヒ其縫合部ノ不整ナルモノ或ハ地質密ニ過キ新シキ  
 糊ノ附着セル者ハ使用ニ適セス。

褥瘡

〔褥瘡〕 身体ノ動搖ニ由リテ衣服及敷布ニ皺壁ヲ生スル時ハ褥瘡ノ因  
 トナル之レ病者ハ皮膚ノ抵抗弱ク且ツ高熱ノ爲メニ體質ノ變化スル



臥位

カ爲ナリ(往年石黒男ハ陸軍看病人ヲ戒テ曰ク本患者ノ褥瘡有無ヲ初  
 ヨリ注意スルハ其最大必主点ヲ理解セル者ナリト説カレタルコトア  
 リシト云フ)

病室及ヒ寢具ヲ整頓シタル後ハ安靜ニ患者ヲ床中ニ平臥セシメ務メ  
 テ靜肅ノ舉動ヲ以テ精神ノ靜安ヲ謀リ噪狂暴迭スルモノニハ終始床  
 頭ニ侍シテ不意ニ蹶起離床スルカ如キコトアルヲ豫防スヘシ此ノ如  
 キ場合ニハ強ヒテ抑損シ再ヒ褥中ニ横臥セシメ可成睡眠セシムルヲ  
 要ス夜間ニ於テハ燈火ヲ暗クシ發熱ノ爲メニ灼熱ヲ訴フル者ハ被褥  
 ヲ薄クシ只寒冷ヲ覺ヘサルヲ以テ度トナシ頭部(前額)ニハ氷卷法ヲ施  
 シ尿便ノ通利ニハ尿便器ヲ與ヘテ此ノ内ニ排泄セシメ藥器及ヒ飲食  
 物ハ醫師ノ命令ヲ遵奉シテ時間ヲ確守シ前記經過ノ項ヲ參照シテ若  
 シ異常ヲ呈スルカ或ハ不耳ナル狀良ヲ起シタル時ハ直チニ醫師ニ報  
 告シテ其處置ヲ乞フヘシ。

〔臥位〕患者ノ臥位ハ自カラ變換スル能ハサル者ハ止テ得ス終始不變  
 ノ臥位ヲ取ルモノナレトモ看護者ハ注意シテ從來左側ノ臥位ニ在

口腔ノ清拭

者ニハ仰臥或ハ右側ノ臥位ヲ取ラシムル等患者ノ苦訴ヲ待タズシテ  
 適宜ニ屢々變位セシムヘシ臥位ノ變換ニ付テモ決シテ力ニ任セテ粗  
 忽ニ急變セシムル等ハ嚴ニ之ヲ戒ムヘシ臥位ノ變換ハ管ニ褥瘡ヲ  
 豫防スルノミニアラサシテ呼吸器ノ疾患殊ニ就下性肺炎等ヲ發セン  
 トスル患者ニ處シテ利益最モ多シ。

身体ニ就テハ日々温湯ヲ以テ全身ヲ拭清シ不潔トナリ易キ部分殊ニ  
 臂下薦骨部ノ如キ褥瘡ヲ起シ易キ處ハ注意シテ觀察スベシ拭清ハ如  
 何ナル場合ニ於テモ出來得ル限り之ヲ行フヲ良トス尿便通利ノ不  
 隨意即チ失禁スルノ患者ニ在テハ最モ注意シ數々失禁ノ有無ヲ檢シ  
 若シ汚染シタル時ハ直チニ交換シテ乾燥セシ者ヲ用ヒ只管テ該部ヲ  
 乾燥ニ保タレムヘシ。

〔口腔ノ清拭〕口腔内ノ清潔ハ大ヒニ必要ナレハ屢々含嗽セシメテ口  
 内ノ不潔液ヲ去リ舌苔厚キ者ハ「ガーゼ」等ヲ指頭ニ卷キテ之ヲ除ク  
 ヘシ此クヌル時ハ患者ハ大ニ爽快ヲ覺ユル者ニシテ精神ノ潤濁セサ  
 ル者ハ概ネ含嗽ヲ好ム者ナリ之レ口内不潔ナルカ爲メニ大ヒニ自覺



口唇ノ保護

チ不快ナラシムルニ由レリ數次此ノ法ヲ行フモ患者ハ決シテ難惡スル者ニ非ス然レトモ精神ノ涸濁セルモノ即チ惱症狀ノ烈シクシテ人事不省ナル者ハ含嗽シ得サルノミナラス往々其含嗽藥タルヲ判セスシテ口内ニ入ル、儘嚙下スルコトアリ然ラサルモ拭清ニ際シ布片或ハ指頭ニ咬傷ヲ蒙ラシムルコトアルヲ以テ此カル場合ニ在テハ線筆ヲ以テ口内ヲ拭ヒ氷片又ハ冷湯ヲ與フルヲ可トス。

〔口唇ノ保護〕口唇ハ常ニ乾燥シ龜裂シテ出血スルヲ以テ華攝林グリスリソノ類ヲ塗布シテ之ヲ豫防スヘシ口唇ノ乾燥甚太シク唇皮剝離セルモノヲ自カラ剝去セシトシテ出血セシムルコト屢々アリ口内清潔ノ法行キ届カサル時ハ口内炎或ハ耳下腺炎等ヲ誘發スルニ至ル。

〔氷菴法〕体温高ク或ハ頭痛ヲ訴ヘ惱症狀ヲ呈スル場合ニ於テハ前額ニ氷菴法ヲ施スヘシ之ノ最モ肝要ナルコトナリトス然レトモ氷菴ヲ一處ニノミ貼シ置カスシテ時々變換スヘシ永ク氷菴ヲ一局部ニ貼用スル時ハ終ニ其部ノ瘰癧ニ陷ルコトアルニ至ルヘシ体温四十度ニ達シ心悸亢進或ハ胸部ノ苦悶ヲ發スル時モ亦胸部(心臟部)ニ氷菴ヲ貼ス

氷菴法

飲食物ノ攝生

飲食物ノ攝養

〔飲食物ノ攝生〕患者ノ藥餌ハ醫師ノ命令ニ從ヒ定メラレタル時間ニ於テ其分量ヲ正シク與フヘシ食物トシテハ輕味ノ流動物、牛乳、卵、(スープ)、稀薄米粥、肉醬ヲ成ルヘク冷却セシメ與フヘシ又其中ニ興奮劑ヲ加フルコトアリ而シテ食前、食後、投藥後モ一々含嗽ヲ爲サシムヘシ。

〔飲食物ノ攝養〕快復期患者ノ飲食攝養ハ極メテ難事ニシテ食慾ノ興進シタル時ハ大人ト小兒ト識者ト否トニ別ナク如何ニ説示スルモ容易ニ制スルコト能ハサルカ如シ若シ夫レ再發ノ基因ヲ訊ヌレハ實ニ此ノ一事ニ多シトス或ル者ハ夜間醒覺食ヲ思ヒ空腹ニ堪ヘス睡眠シ得サルコトアリ看護者モ一層可憐ノ情ヲ惹起スル者ナレトモ決シテ一時ノ同情ニ溺レテ擅マニ醫師ノ許可セサル者ヲ假令少量ト雖トモ與フヘカラス然レトモ品質ニ由テハ又醫師ニ具申シテ其可否ヲ問ヒ許可セラレタル者ニ限り與フヘシ許可シ難キ者ト雖トモ請フコトアレハ一度ヒハ診察時ニ於テ看護者ハ患者ノ意思ヲ代表シテ其可否ヲ乞フ時ハ大ニ患者ニ満足ヲ與フルコトヲ得ヘシ多ク許可セラル、



疥瘡ノ豫防

ハ水飴、菜汁、小麦製麵麩、「ホーロ」、「ビスケット」等ノ類ナリ。  
〔疥瘡ノ豫防處置〕 高熱持續シ、身体ノ營養及ヒ新陳代謝機能ノ衰頹、筋  
肉、脂肪及ヒ皮膚ノ抵抗力衰フルニ際シ、終始一定ノ臥位ヲ取テ、一局部  
ノ強壓迫ヲ受クルカ更ラニ尿便ノ失禁及ヒ腸出血、心臟痙攣ヲ起スノ  
慮アリテ、身体ヲ動搖スルコトヲ禁セサルヘカ、ラサル場合ニ於テハ止  
ヲ得スシテ、發スルモノニシテ主ニ薦骨部、大轉子部ニ生シ(或ハ膝關節  
ノ内外側、足踝、後頭關節、肩胛骨部等ニ生スルコトアリ)皮膚ノ痲死シテ  
黒色ヲ呈シ、漸ク深ク侵敗シテ皮下ノ組織及骨面ニ達シ、爲ニ一層衰脫  
ヲ増進セシメ、或ハ爲ニ死因トナルコトアリ、其經過ハ一般外傷ノ如ク  
迅速良好ナラス甚クシク醜膿スルニ至レハ、防腐的、外傷ノ處置ヲ要ス  
ル者ナリ。  
初期ニシテ皮膚ノ發赤セルモノハ、屢々清潔ニ拭去シ、濕潤ヲ避ケ、アル  
コホルルヲ塗布シテ、輕ク摩擦シ、皮膚ノ擦過セル者ハ「コロジューム」或ハ  
絆創膏、軟膏等ヲ貼シテ、再ヒ壓迫ヲ避ケヘシ。  
元來疥瘡ヲ生セシムルハ、畢竟看護其當ヲ得サルノ証ニシテ、最モ大ナ

腸出血ノ豫防及處置

ル耻辱トスル處ナリ去レト已ムヲ得サル場合ニ於テハ、強チ然ルニモ  
アラサレトモ一般ニ看護ノ不注意ヲ証スル所以ナリトス去レト既ニ  
發生セシメタル時ハ、又如何トモ爲スヘキコアラサレハ、正直ニ醫師ニ  
上申シテ速ニ適當ノ療法ヲ受クヘキナリ。  
〔腸出血ノ豫防及處置〕 腸出血ノ微候ヲ發見スル時ハ、其豫防法トシテ  
下腹部殊ニ右ノ腸骨窩部ニ近キ處ニ氷捲法ヲ貼スヘシ、即チ其微トシ  
テハ、腸部膨滿、過敏時々疼痛アリテ、雷鳴下痢等ナリ、而シテ患者ハ身体  
ヲ一層安靜ナラシメ、動搖セシムルニモ成ルヘク、靜カニスルヲ要ス、又  
下痢ニ注意スルト同時ニ、毎回便質ヲ檢シ、若シ出血セル時ハ、其儘蓄ヘ  
置キテ、醫師ニ示シ兼テ其量ヲ測リ、之ヲ溫度表記事ニ記入シ、患  
者虛脱セントスルノ狀アル者ハ、酒類又ハ他ノ興奮藥劑ヲ與ヘ四肢ノ  
冷欠セル者ハ、湯嚢ヲ以テ温テ附與スルコトヲ勉メ、直チニ醫師ニ報告  
スヘシ、又仮令ハ少量ノ出血ト雖トモ、同様慎重ノ取扱ヲ要ス。  
此ノ前徵及ヒ心臟痙攣ノ前徵アル者ハ、多クハ特ニ醫師ヨリ注意ヲ受  
クル者ナレトモ、看護者ハ注意ヲ受クルマテモナク、其大略ヲ豫記シテ



体温脈搏呼吸  
吸尿量ノ測定  
注意  
冷水浴温浴

其準備及方法

注意觀察スベシ。  
 〔体温、脈搏、呼吸、尿量等ノ測定注意〕命ニ從ヒテ測定シ法ニ倣ヒテ記入  
 ヲ其尿量ノ如キハ一晝夜間ノ總量ヲ記入シ置クヘシ。  
 〔冷水浴〕本病患者ノ經過中醫師ヨリ冷水浴ヲ命セラル、コトアリ或  
 ハ又温浴ヲ處セラル、コトアリ。  
 其温度ハ醫師ノ命令ニ從フヘシト雖トモ通常攝氏二十度以上二十五  
 度迄ノ冷水ヲ用ヒ温浴ニ在テハ通常ノ温湯ヲ用ユヘシ浴及温浴ノ  
 目的ハ單ニ身体ヲ清洗スルノミニ非ス一般經過ヲ良好ナラシメンカ  
 爲ニ用ユル者ニシテ一ツノ療法ニ屬スルモノナレハ苟モ其目的ヲ誤  
 ルイアルヘカラサルハ勿論且ツ重症高熱ノ患者ニ對シテ行フ者ナレ  
 ハ極メテ細心注意セサレハ其目的ノ徒勞ニ屬スルノミナラズ反ツテ  
 病症ヲ増悪セシムル者ヲラスンハ非ス。  
 〔其準備及方法〕特別ノ裝置ニ由レル全身浴盤ヲ用ユ完全ナル浴室及  
 患者運搬ノ機關具備セル處ニ在テハ靜ガニ患者ヲ運搬車上ニ移シ浴  
 室ニ至ラシムヘシ若シクハ病室内ニ於テ之レヲ行フヘシ此ノ場合ニ

在テハ浴盤ヲ臥床ノ側ヲニ備ヘ冷水或ハ温湯ヲ充シ二人又ハ三人ノ  
 看護者ハ患者ヲ拉シテ衣服ヲ脱セシメ各々上身、下肢、腰部ヲ擡起シ浴  
 盤内ニ移シテ平臥セシメ頭首ヲ除キテ全身ヲ浴中ニ没セシム患者ノ  
 耳中ニハ棉花ヲ充慎シテ水液ノ入ルヲ防キ衰弱セル患者ニ對シテハ  
 酒類ヲ氷片ニ混シテ與ヘ成ルヘク疲勞ヲ避ケシムヘシ又浴中ハ患者  
 大ヒニ爽快ヲ覺ユル者ナレトモ或ハ反ツテ大ヒニ嫌厭スル者アリ時  
 間ハ醫師ノ指揮ニ從フヘシト雖モ通常冷温ヲ論セス十分乃至十五分  
 ナ超ユルコトナシ而シテ入浴中豫メ臥床ヲ整頓シ衣服ヲ褥上ニ敷キ  
 其上ニ一枚ノ毛布及拭布ヲ展張シ患者ヲ再ヒ擡起シテ其上ニ移シ手  
 提ク布ヲ以テ全身ヲ覆ヒテ患者ヲ反對ノ側ニ側臥セシメ背部ノ下ニ  
 送り下タノ衣服ヲ以テ半身ニ着セシメ更ラニ患者ヲ反轉セシメ毛布  
 及拭布ヲ拔キ去リテ下タノ衣服ヲ着セシムヘシ此ノ如ク爲ス時ハ患  
 者ノ身体ヲ動搖セシムルコト尠ナクシテ容易ニ完了セシムルコトヲ  
 得ヘシ。  
 浴前浴後トモ必ス檢温ヲ行フヘシ。



冷水濕布纏  
絡法

浴後ハ浴前ニ比シテ体温一般ニ下降シ從ツテ患者ハ爽快ヲ覺ユヘシ  
 尙ホ斯ノ方法ヲ數次反覆シテ行フコトアリ然レトモ患者ノ中ニハ或  
 ハ冷浴ニ堪ヘサル者アリ。  
 浴中ハ脉搏ニ注意シ虚脱ニ陥ルコトナキ豫警戒スヘシ。  
 浴後ハ微温ノ牛乳「スープ」酒類ヲ與フヘシ。  
 腸出血後ハ二三日ヲ經ルニアサレハ決シテ行フコトナシ又既ニ浴  
 法ヲ處セラレタル者ト雖トモ若シ腸出血ヲ起シタル時ハ一應醫師ニ  
 申告シテ其施否ヲ問フヘシ。  
 【冷水濕布纏絡法】斯ノ法モ亦冷浴ト同一ナル目的ヲ以テ行フ者ニシ  
 テ一日一回或ハ數回施行スルコトアリ其裝置ハ一ツノ空褥上ニ毛布  
 ナ敷キ上ニ冷水或ハ氷ニ浸セル敷布ヲ張展シ裸体ノ儘患者ヲ其上ニ  
 移シテ手捷ク敷布ヲ以テ全身(頭首ヲ除ク)ヲ覆ヒ五分乃至十分間ヲ經  
 テ濕布ノ温乾スルニ先ヲ更テ同様ナル裝置ヲ設ケタル他ノ褥上  
 ニ患者ヲ移シ前回ノ法ヲ反覆スル者トス其回数及時間ハ一ニ醫師ノ  
 指揮ニ從フヘシ而シテ其前後ニ於テハ浴法ニ於ケルカ如ク毎回検温

スルコトヲ要ス又斯ノ法ヲ行フ時ニ在テハ検温ハ腋下ニ於テセスシ  
 テ直腸ニ於テスヘシ直腸ハ腋下ニ比シ通常〇五分ノ高差アル者トス。

腸室扶斯看護法終



# 赤痢病者看護法

## 第一 發生及傳染ノ經路

赤痢

本病ハ元ト熱帶地方ニ於ケル一種ノ風土病ニシテ我邦ニ在テハ夏期及晩夏、初秋ニ亘リテ最モ多ク流行傳播シ北部地方ヲ除クノ外至ル處今ヤ殆ソト其流行ヲ見サルノ地ナキニ至レリ。

病菌

〔**病菌**〕其病菌ハ或ハ「**アノールバ**」ナリト云ヒ或ハ細菌ナリト云ヒ二者各其説ク處ヲ異ニセシモ近年志賀氏一ノ細菌ヲ發見シテヨリ之レヲ赤痢ノ病原菌ト爲スニ至レリ病原ハ腸内殊ニ大腸ノ下部ニ播殖ス。

誘因

〔**誘因**〕患者ハ年齢ニ關係ナク小兒、壯年、老人モ亦等シク之レニ感染スルモノナリ腸胃ノ如キ消化器ニ疾患ヲ有スルモノニ在テハ殊ニ感受シ易ク下痢、寒胃、食傷等ハ其誘因ヲ爲スモノナリ。

潜伏期

〔**潜伏期**〕潜伏期ハ極メテ短カクシテ平均一日乃至三日トス。

症候

〔**症候**〕初メ輕易ノ下痢ヲ覺ヘ一日三回乃至數回(稀釋ニシテ便質ヲ有

重症

ス)上圖シ日ヲ逐テ便數増加シテ頻繁トナリ裏急後重ヲ兼テ腹痛、胃痛ヲ訴ヘ益々増加シテ一日十回乃至六十回ニ及ヒ劇症ノモノニ至リテハ或ハ尙夫レヨリモ増加シテ終ニハ數フルニ迫ナキモノアリ便數ノ増加ニ從フテ便量漸ク減少シテ臭氣ナク次第ニ便質ヲ失シ終ニハ粘液、血液ヲ混シ或ハ全然粘血、濃汁ト化シ其惡性ナルモノニ在テハ漿液性ニシテ臭氣強キモノ多量ヲ下スコトアリ。

輕症

〔**重症**〕舌ハ乾燥シテ汚苔ヲ蒙リ渴強ク全身疲勞甚太シク体温ハ著ルシク上昇セス三十八度乃至八度五分ニシテ一般ニ低ク腹部ノ雷鳴裏急後重、仙痛烈シク或ハ胃痛ヲ訴ヘテ嘔吐シ便々頻リニ踵リ苦惱忍ビ難ク終ニハ上圖ニ堪ヘサルニ至ル食氣次第ニ欠乏シテ漸々衰弱ヲ増加シ重症者ニ在テハ肛門ノ活約筋痙痺シ或ハ脱肛シ不隨意ニ便ヲ漏ラシ頻渴引飲、脈搏微弱トナリ全身憔悴シテ眼窩陷凹シ鼻梁突聳、四肢欠冷、チヤノーセヲ呈シ生力沈酔シ嗜眠ニ陥リテ終ニ死亡スルニ至ル。

〔**輕症**〕輕症患者ニ在テハ通常數日ニシテ下痢止息シ裏急後重退失シ口渴ナク食慾恢復シ便性復健シテ一週間乃至二週間ノ後ヲ治癒スル



モノナレハ慢性トナルトキハ數ヶ月或ハ一年ノ久シキニ至ルコトアリ恢復後モ食事ノ攝生足ラサルトキハ屢々再發スルモノナレハ最モ注意スルコトヲ要ス。

### 第二 看護法

#### 隔離

#### 排泄物ノ處置及消毒

〔隔離〕八種傳染病ハ皆隔離ヲ要スルモノナレハ可出來の迅カニ嚴重ニ隔離法ヲ施行スベシ。  
〔排泄物ノ處置及消毒〕本病ノ病毒ハ主ニ患者ノ糞便中ニ混在スルモノナレハ大便及ヒ其レニ由テ汚穢セシ一般ノ物品ハ悉皆嚴重ニ消毒法ヲ行フベシ。  
便器中ニハ十倍石灰乳ヲ容レ置キ使用後醫師ノ許可ヲ經タル後ハ汚物ニ更ラニ十倍ノ石灰乳ヲ投シテ燒却或ハ煮沸セシメ一定ノ箇處ニ埋塞セシム。  
便器ハ毎回清潔ニ洗滌シタル後チ密蓋シ置クヘシ。  
便意不隨意ニシテ絶ヘス失禁スルモノ或ハ衰弱甚ダシクシテ上圖

#### 患者ノ處置

得サルモノハ臀下ニ油紙ヲ敷キ其上ニ綿布ハ布片ヲ展張シテ排セシメ屢々交換シ衣服及臥具ヲ汚穢セシメサル様注意スヘシ。  
便ニ由テ汚穢セシ衣服類ハ石炭酸水ヲ注キテ一定ノ容器中ニ投棄シ密蓋シ置キテ煮沸又ハ蒸氣消毒ヲ行フベシ。  
其他病室内ノ消毒及看護者身体ノ消毒ハ前章通則消毒ノ項ヲ參照スヘシ。  
〔患者ノ處置〕患者ハ輕重ヲ論セス安靜ニ就褥セシメ腹部ヲ温包スヘシ即チ「フランネル」腹巻、温石、温奄法ヲ施シ温カナル粘滑飲料ヲ與フヘシ口渴甚ダシク嘔氣ヲ催スモノニ在テハ少量ノ氷片ヲ與ヘ又ハ冷湯ヲ少量ツ、嚥下セシムヘシ脱肛或ハ肛圍炎ヲ起シタルモノハ清潔ニ拭去シ「オレフ油」或ハ「華攝林」ノ類ヲ棉花或ハ「脱脂ガーゼ」「リンド」等ニ塗布シテ貼用シ又脱肛セルモノニ在テハ指頭ニ「華攝林」「オレフ油」ヲ塗布シ壓入匡整スベシ重症ニシテ衰弱セル患者ニハ屢々酒類ノ如キ興奮劑ヲ與ヘテ虚脱ニ陥ルヲ防クヘシ嘔吐烈シキモノニハ心窩部ニ芥子泥ヲ貼スルコトアリ或ハ肛門坐藥ノ挿入坐浴ノ施行浣腸法ヲ處



洗腸

スルコトアリ。

〔洗腸〕洗腸液ハ通常温ニ温メタルモノヲ用ヒ、イルリカー「トル」ニ軟膜製胃管カテーター「ル」或ハ大尿道カテーター「ル」ヲ附シタルモノヲ用ヒ重壓ニ由リテ徐々ニ洗注スルヲ可トス其量多クシテ二三百死ニ至リ且ツ深部ニ注入スルヲ要スルモノナレハ「カテーター」ノ尖端ニハ多量ノ華攝林或ハ「オレフ」油ヲ塗布シ静カニ深ク挿入シテ洗注スヘシ而シテ藥液ハ可成腸内ニ永ク留マラシムルヲ以テ目的トナスモノナレトモ其急後重甚クシク努嘔ニ由テ反ツテ直チニ逆流シ充分効ヲ收ムルコト能ハサルモノナレトモ可成患者ヲシテ永ク耐ヘ忍ハシムルコトヲ務ムヘシ「肛門」ニガーセ、綿、等ヲ充テ其上ヨリ圧ヲ加ヘ忍ハシムル可ナリ或ハ臀部ニ圧ヲ加ヒテ「肛門」ノ閉鎖ヲ助クヘシ

〔便性〕便ハ其性質ニ由テ粘液便、血液便、粘血便、胆汁便、漿液性便等ノ區別アリ毎回其性質ニ注意シ蓄ヘ置キテ醫師ノ回診時之レヲ示シ許可セラレタル後チ埋塞セシム而シテ晝夜或ハ十二時間毎ニ其回数ヲ算シ温度表中便通記事ノ部ニ記入スヘシ便通頻繁ナル者及ヒ同時ニ數

便性

飲食物

人ヲ看護セサルヘガラサル場合ニ於テハ看護者モ回数ヲ記憶スルコト困難ナレハ患者ノ床頭ニ二個ノ箱ヲ備ヘ其一方ニ數ヲ示スヘキ基石ノ類ヲ入レ置キ毎回其一個ヲ他方ノ箱中ニ投セシメ一晝夜ニ滿ツルニ及ソテ之ヲ算スルトキハ正確ニシテ最モ便利ナリトス。

〔飲食物〕患者ノ飲食物ハ醫士ノ定メタルモノ(粘滑流動物)ノ外決シテ與フヘカラス可成温メテ用ユヘシ快復者ニハ稍ヤ固形ノモノヲ許可セラル菓汁、水飴、葛湯ノ類ハ多ク快復者ノ攝取ニ供ス。

赤痢病看護法終



# 虎列拉病者看護法

## 第一 虎列拉病ノ發生及傳染經路

虎列拉

虎列拉病ハ印度地方ニ於ケル風土病ニシテ屢々流行シ西曆千八百十七年ヨリ全九十二年ニ至ル七十五年間ニ於テハ病毒遠ク全歐洲ニ侵入シテ大流行ヲ來タシ非常ナル死亡數ヲ出シタリト云フ我邦ニ於ケル本病ノ流行ハ其時代ヲ審ニモスト雖モ今ヲ去ル四十餘年前東京ニ於テ大ナル流行ヲ來シタルコトアリト云フ爾後年々夏期ニ至レハ處々ニ發生流行シ或ハ散發スルコトアリ。

病源

〔**病毒**〕虎列拉ハ最モ急劇猛烈ナル傳染病ニシテ其病毒ハ消化器ヨリ侵入シテ胃腸ヲ侵シ毒質ノ感受ニ由テ發病スルモノナリ。本病ハ男女及年齡ニ關係ナキモ其比較ハ小兒ヨリ寧ロ老人ニ多シトス殊ニ腸胃ノ衰弱セル者ハ其感受容易ナリトス。

經路

〔**經路**〕病毒侵入ノ經路ハ食物ニ混和シテ口腔ニ入り胃ヲ經過シテ

腸ニ至ルニ及ンテ茲ニ發育ス細菌ハ濕氣ニ由テハ大ヒニ發育力ヲ増シ水中ニ於テモ亦迅カニ發育シ乾燥ニ由テハ容易ニ死滅スルモノナリ。病毒ハ患者ノ腸排泄物中ニ混和シ体外ニ辭ンテハ井水及濕地ニ能ク發育ス。

潜伏期

〔**潜伏期**〕數時間乃至一二日ニシテ三日以上ヲ越ユルコトナシ。

誘因

〔**誘因**〕食物ノ不攝、寒胃及腸胃ノ疾患殊ニ下痢ハ其主ナル誘因ナリ。

前驅症

〔**前驅症**〕全身ノ違和、四肢ノ倦怠、食思欠乏、無痛ノ下痢等ニシテ始メ稀釋ノ水様便ヲ下シ其便ハ多量ニシテ糞質ヲ有スレトモ漸次變質シテ糞臭ヲ失ヒ恰カモ米泔汁様ノ下痢ト化スルニ至ル。

經過

〔**經過**〕輕キモノハ三四日乃至一週間ニシテ治癒シ重病ニ在テハ二週間以上ヲ費ヤシ惡性ノモノハ發病後數時間乃至一二日ニシテ死亡スルモノ多シ。

症候

〔**症候**〕患者ハ峻烈ナル下痢ヲ來スコト一時間數回其便質ハ米泔汁様無臭ニシテ且ツ多量ナリ次テ綠色ヲ帶フル胃ノ内容物及ヒ食物ノ半



ハ消化セルモノヲ吐出ス心窩部ノ苦悶甚シタク身体衰弱シ顔面汚穢  
 蒼白色ヲ呈シ眼窩陷没シ眼圍ニ鉛色ノ環ヲ繞ラシ舌及口唇ハ強ク乾  
 燥シ煩渴苦悶冷汗ヲ流シ四肢欠冷シ体温下降シテ三十六度以下ニ至  
 ル脈搏疾速ニシテ細小トナリ下痢嘔吐増進シ皮膚ハ失彈シ聲音嘎嘶  
 シテ微弱トナリ尿閉シ排腹部ニ烈シキ痙攣性ノ疼痛アリ此ノ如キ症  
 狀ヲ發シタル後チ暫時ニシテ諸症狀益々増進シ衰弱増加シ終ニ虛脱  
 ニ陥リ數時間ニシテ死亡スルニ至ル。

第二期即チ反應期

〔第二期即チ反應期〕前症狀ヲ發スル者ハ多クハ數時間内ニ死亡スル  
 者ナレトモ幸ニ一二日ヲ經過スルニ至レハ第二期即チ反應期トナリ  
 前症狀ハ漸々輕快シ皮膚ニ温暖ヲ生シ呼吸脈搏從ツテ減シ下痢止ミ  
 尿利シ排腸部ノ痙攣性疼痛心窩部ノ苦悶止ミ体温漸次増昇シテ平温  
 ニ復シ食氣振ヒ一二週間ヲ經過スル時ハ全治ニ至ル者ナリ。

重症反應期

〔重症反應期〕重症反應期ハ之レヲ虎列拉泰斐土ト云フ其症候ハ腸壁  
 扶斯症ノ如ク發熱シ顔面潮紅頭痛シ精神恍惚トナリ四肢ニハ猩紅色  
 ノ疹ヲ發シ其他咽喉及腸耳下腺陰部等ニ實扶的里亞性ノ局所炎症ヲ

第二 看護法

來タシ或ハ腎臟炎ヲ發シ尿閉シ尿毒症ヲ起シ頭痛嘔吐甚タク嗜眠  
 昏睡或ハ譫妄及痙攣ヲ發シテ死亡スベシ。

看護法

虎列拉ハ劇烈ニシテ迅速ナル傳染病ナレハ前症狀ノ二三ヲ有シテ夏  
 期ニ發現スル者ハ先ツ虎列拉ト仮定シ直チニ隔離シ消毒ヲ施シ嚴重  
 ナル豫防的取扱ヒヲ爲ス可シ若シ甚タシク下痢及嘔吐ヲ兼ネ稀釋米  
 泔汁樣ノ物ヲ吐嘔スルモノハ其慎偽ヲ問フノ要ナシ先ツ第一速カニ  
 嚴重ナル隔離法ヲ行ヒ醫師ヲ迎フルト共ニ看護者ニ於テモ應急ノ手  
 當ヲ爲サ、ルヘカラス。

救急處置

〔救急處置〕苦惱甚タシキカ故ニ靜臥セシムルコト容易ナラサレトモ  
 能ク患者ニ諭シテ褥中ニ臥セシメ兼テ全身及ヒ四肢ノ欠冷セルモノ  
 ニハ湯婆ヲ用ヒ或ハ芥子ノ脚浴芥子泥ノ貼用酒精濕布ヲ以テ摩擦法  
 等ヲ行ヒ下痢甚タシキモノニハ適宜ノ止痢劑ヲ與ヘ嘔吐及心窩部ノ  
 苦惱甚タシキモノニハ芥子泥ヲ心窩部ニ貼シ口渴甚タシキモノニハ



飲食物

止渴飲料及ヒ冷湯氷片ヲ嚥下セシメ成ル可ク酒類ノ如キ興奮劑ヲ與ヘテ虛脱ニ陥ルヲ防キ兼テ体温ノ快復ヲ謀ルヘシ數時間ノ後チ皮膚温暖ヲ生シ下痢嘔吐緩解シ苦悶消退、脈搏有力トナリ尿利シ得ルニ至レハ稍ヤ安靜トナリ就眠シ從ツテ恢復ニ至ルベシ。

醫療ノ處置

〔飲食物〕患者ノ飲食物ハ滋養性流動物ヲ少量ツ、温メテ與フヘシ興奮劑トシテハ「ブランデー」「卵ブラン」葡萄酒ノ類止渴飲料トシテハ里母奈理等ニシテ成ルベク粘滑ノ飲料ヲ給シ茶、珈琲、赤酒、温牛乳、肉醬等ノ熱性飲料ヲ飲引セシメテ發汗ヲ促スヘシ。

食鹽水皮下注入

〔醫療ノ處置〕芥子泥ノ貼用ハ屢々應用セラルヘシ又温熱附與ノ裝置湯婆、温濕布、温浴或ハ脚浴、「カンフル油」皮下注射或ハ食鹽水ノ皮下注入、藥液流腸等ナリ。

其裝置

〔食鹽水皮下注入〕虎列拉ニ於テハ血液中ノ水分脱却セラレ直チニ虛脱ノ狀ニ陥リ死亡スルモノナレハ之レニ對シ〇、六%食鹽水ヲ二三リトトル皮下ニ注入シテ血液中ニ吸收セシメ其容量ノ増加ニ由テ仮死ニ陥ルヲ豫防スルノ目的トシテ施行セラル、モノナリ。

吐瀉物ノ消毒及其取扱法

〔其裝置〕〇、六%食鹽水ノ兼テ殺菌セラレタルモノヲ攝氏三十八度ノ温ヲ與ヘテ温保シ其冷却ヲ防キ食鹽注射器ノ裝置ニ由テ皮下(内股、腹側、胸部)ニ注入吸收セシムルモノナレトモ華攝林ヲ塗布シテ手掌ヲ以テ兼テ求心性ニ摩擦シ其吸收ヲ助クヘシ脈搏既テニ觸知シ得ヘカラサリシ重症モ吸收ト共ニ直チニ其搏動ヲ觸知スルヲ得ルニ至ルベシ。

〔吐瀉物ノ消毒及其取扱法〕本患者ノ吐瀉物ハ細菌混入ノ巢窟ナレハ毎回一定ノ器中ニ投シ密蓋シ石灰乳或ハ石炭酸水ヲ投シ置クヘシ又吐瀉物ニ由テ汚穢シタルモノニシテ燒却セシメ得ルモノハ隨時燒却スヘシ患者ニ使用シタル一切ノ物品ハ蒸氣消毒ヲ行フベシ。

病室其他看護者身体等ノ消毒ハ前篇ヲ參照スベシ。

虎列拉病看護法終



# 發疹室扶斯看護法

## 第一 發生及傳染經過

發疹室扶斯

發疹室扶斯ハ重症迅速ナル熱性病ニシテ稍ヤ腸室扶斯ニ近似スルモ其病種及經路ハ全ク腸室扶斯ト相反ス而シテ本症ハ亦觸接性ノ傳染ヲ爲ス。

病源

〔病源〕 病毒ハ患者ノ蒸發氣、疹ノ落屑ニ依リテ感染シ或ハ空氣ヲ介シ時トシテハ排泄物中ニモ混在シ或ハ觸接ニ由リ又ハ衣服、器具其他ノ物品、病室等ニ依リ直接間接ニ感染ス。

經路

〔經路〕 本病ノ体内ニ侵入スル經路ニ就テハ諸說區々ニシテ未タ確定セスト云フ。

發生

〔發生〕 本病ハ大ナル流行ヲ爲ス者ニシテ殊ニ日常不潔ナル下等ノ生活ヲ營メル部落ニ多ク上流社會ニ流行スルコト極メテ稀ナリ即チ不潔ナル空氣中ニ稠接シテ居住シテ食物不潔ニシテ營養不足ナル等ハ

潜伏期

本病ノ傳染蔓延ニ大ナル影響ヲ及ホス者ナリ故ニ饑饉或ハ戰時ニ於テハ最も多ク傳播流行シ時トシテハ監獄等ニ於テ發生傳播スルコトアリ。  
本病ハ男女ノ性ニハ關係セサルモ比較的稍ヤ壯年者ニ多キ危險ナル疾患ナリトス。  
〔潜伏期〕 潜伏期ハ十日乃至十四日ニシテ人ニ依リ其間多少ノ遲速アリ。

前驅症

〔前驅症〕 通常疲勞、倦怠、食氣欠乏、四肢ノ疼痛、頭痛等ヲ齎ス者ナリ。

症候

〔症候〕 惡寒戰慄ニ伴フテ發熱シ俄カニ体温上昇シ一二日ニシテ既ニ四十度乃至四十一度ニ及ヒ稽留シ顔面潮紅、眼球充血、皮膚灼熱シ疲勞甚クシテ劇烈ナル頭痛眩暈、耳鳴等ヲ發シ腰痛亦甚クシテ嘔吐ヲ催シ舌ハ乾燥シテ苔厚ク脈搏ハ疾速トナリ精神恍惚、譫語シ、重聽シ、尿量減少或ハ尿閉シ又ハ濃厚トナリ咳嗽ヲ發ス而シテ發病後三日乃至一週日ニシテ軀幹、四肢及顔面等ニ紅色ノ斑疹ヲ發シ或ハ斑点狀ヲ爲スコトアリ又疹ハ二三日ヲ經ルニ至レハ赤色或ハ暗赤色ノ血斑狀トナ



輕症

重症

リ數日ニシテ減退ス。

〔輕症〕輕症患者ニ在テハ二週間ニ至リ体温下降シテ全身ノ諸症狀、腦症狀等漸々緩解シ食慾稍ヤ振ヒ佳良ナル徵候ヲ呈ス。

〔重症〕重症ニ在テハ前經過ノ諸症狀ハ漸々増進シテ衰弱加ハリ体温高ク惱症狀ハ殆ント腸窒扶斯ノ重症經過ノ如ク精神恍惚トシテ譫妄シ益々増進シテ脈搏幽微トナリ嗜眠或ハ昏睡ニ陥リ死亡ス然レトモ儂倅ニシテ快復スル者ニ在テハ二週間ノ終期ニ近ツキ大發汗ヲ來シ次テ体温俄カニ下降シ二三日ニシテ平温ニ復シ諸症狀亦從ツテ快輕シ患者ハ疲勞ノ爲メニ熟睡シ食慾直チニ振ヒテ快復期ニ至ルヘシ此ノ時皮膚ハ細小ナル落屑ヲ爲スコトアリ。

本病ノ重症ノ轉期ハ多ク死亡スル者ニシテ殊ニ老年者及ヒ身體常ニ羸弱ナル者ハ一層危險ナリトス。

第二

豫防及消毒

豫防及消毒

〔豫防法〕箇人的豫防法トシテハ成ル可ク患者及ヒ其近傍ニ接近セズ

消毒法

清潔法ヲ勵行シ爾他ノ攝生ヲ重シテ健康ヲ害セサルニ在リ。

看護者ハ清潔法ヲ勵行スルノ外空氣ノ交換ヲ專ラトシ兼テ攝生ヲ重シテ患者其ノ他病毒ノ汚染物ニ觸接セル毎ニ嚴重ニ手指ヲ消毒スヘシ。

〔消毒法〕消毒法ハ只々注意嚴密ニ施行スルニ在リ他ノ觸接性傳染病ト少シモ異ル處ナシ。

皮膚ノ落屑モ亦同シ然レトモ極メテ注意スヘキハ細微ナル落屑アル即チ衣服、蒲團ノ如キ者ハ之レヲ動搖シ若クハ之レヲ敲打スル等ノコトアルヘカラス然ラサレハ病毒ハ塵埃ト混シ空氣中ニ飛揚スルコト甚タシケレハナリ之レ傳染病患者ヲ取リ扱フ者ノ最モ注意ヲ要スル處ナリトス醫師診斷時ニ於テ患者ノ被衿ヲ除キ衣服ヲ解キ又ハ之レヲ覆フニモ決シテ粗暴ナル取扱ヒアルヘカラス之レ等ハ觸接性傳染病ニ於テ最モ注意ヲ要スヘキコトトス。

第三

看護法



本症ニ於ケル看護法ハ前掲腸窒扶斯病ノ項ヲ参照シ同様ノ看護ヲ爲  
メヲ要ス。

發疹窒扶斯看護法終

痘瘡  
病毒

潜伏期

痘瘡看護法

第一

發生及傳染、經路

痘瘡ハ流行性觸接傳染病ニシテ冬季間ニ多ク流行ス。  
 [病毒] 病毒ハ患者ノ皮膚粘膜ニ發生セル痘瘡ノ内容物中ニ混在シ患  
 者ニ接觸スルニ由テ傳染シ或ハ其病毒空氣中ニ揮散セル者ヲ吸入ス  
 ルニ由テ或ハ衣服、寢具、物品、玩具等ニ附着セル者ニ接觸シ又ハ之レ等  
 ノ物品ヲ介シテ間接ニ傳染ス。  
 本病ハ年齢ニ關係ナク小兒及老人モ亦能ク感染スレトモ一ト度本痘  
 ナ經過セシ者又ハ種痘ヲ經過セシ者ニハ感染スルコト甚ク稀ニシテ  
 仮令之レニ犯サル、モ重症ニ至ラスシテ治癒ス之レニ反シテ妊婦及  
 産婦ハ本病ニ感シ易ク時トシテハ胎兒モ亦胎内ニ於テ感染スルコト  
 アリ。  
 [潜伏期] 一週半乃至二週間ニシテ其間前驅症ノ著ルシキ者ナクシテ



症狀

俄然發病スルコト多シ。  
 〔症狀〕 症狀ハ俄カニ劇シキ惡寒、戰慄ヲ來シ發熱シ頭痛強ク且ツ劇シキ腰痛ヲ訴ヘ舌乾燥シテ汚苔ヲ蒙リ精神恍惚トシテ不眠譫語シ熱ハ四十度乃至四十一二度ニ稽留シ脈搏疾速トナリ食思欠乏シ嘔吐ヲ催スコトアリ面シテ發病第二日ニ至リ皮膚ニ紅色ノ斑ヲ生ス之レヲ前驅發疹ト云ヒ半日或ハ一日ニシテ消退ス。

經過

〔經過〕 第三日ニ至レハ顔面(眼圍、口圍、前額、髮生部)ニ小疹ヲ發シ体温ハ一時下降ス疹ハ漸々軀幹及四肢ニ及波シ始メハ紅色ヲ呈シテ多ク叢集シ或ハ疎散ス其翌日ニ至レハ發疹發育シテ柔軟ナル小結節ヲ造リ漸次ニ水泡ト化シ益々増大スルニ從ヒ(第六日)終ニ化膿スルニ至リ体温再ヒ上昇ス之レヲ灌膿熱トス。  
 疱疹ハ其中央稍ヤ陷沒シテ臍ヲ造リ周圍ニ紅色ノ暈輪ヲ繞ラス者ナリ而シテ其多ク叢集セル顔面等ノ部ハ腫起殊ニ甚太シク眼險ノ腫起ニ由テ眼球ヲ見ルコト能ハサルニ至ル疱疹ハ各自ニ融合シテ一般膿痂トナリ顔面ヲ覆フヲ以テ醜惡極リナク一見シテ其誰彼ノ識別スルコト

ト能ハサルニ至ル加フルニ痒痛忍ビ難シ瘡ハ又鼻腔、口腔、咽頭、喉頭、氣管及ヒ眼ニモ延發シ其咽喉頭等ヲ侵サル、者ハ嚥下困難トナリ音聲嘎嘶シ鼻腔ヲ侵ス者ハ鼻腔爲メニ閉塞セラレ精神終ニ恍惚タルニ至ル者アリ。

發疹後第十二三日ニ至リ疱疹ノ疹皮潰ヘテ惡臭ヲ放タル膿汁ヲ漏シ漸々乾燥シテ黃色ノ痂皮トナリ皮膚ノ腫脹亦從ツテ減退シ体温次第ニ下降シ三週間ノ後ニ至リテ落痂ヲ始メ爾他ノ諸症狀亦輕快シ終ニ瘡痕ヲ止メテ治癒スヘシ。

疱疹ノ深部ヲ侵シタル者ハ深キ瘡痕ヲ印シ淺輕ナル者ハ小淺ナル瘡痕ヲ止メ爬搔シタル者ハ不正形ノ醜瘡痕ヲ止ムヘシ。

瘡痕ハ數ヶ月ノ間暗赤色ヲ帶ヒ漸次其色ヲ薄クシ終ニハ脱色スル者ニシテ髮毛ノ脱落セル者ハ治後再ヒ發生スルコトアリ。

合併症

〔合併症〕 本病經過中ノ合併症ハ氣管支加答兒、肺炎、腫瘍、肋膜炎、丹毒、褥瘡、眼ノ諸炎等ナリ。  
 眞痘及假痘ト稱スルハ只其輕重ニ由テ區別セルノミニシテ尙他ニ異



種ノ多症アルヲ知ラサルヘカラス。

### 第二

### 豫防及ヒ消毒法

#### 豫防法

〔豫防法〕豫防トシテハ成ルヘク病毒ニ接近セシメサルコトヲ要ス而シテ必ス種痘ヲ施スヘシ。

患者ハ嚴重ニ隔離スルコトヲ要ス即チ避病院、隔離室等ニ送り全ク交通ヲ遮斷シ家屋及内部一般ノ物品ニ消毒ヲ行フヘシ。

痘瘡ノ發生セル時ハ小兒大人ノ別ナク一般ニ必ラス種痘法ヲ勵行スヘキ者ナリ。

#### 消毒法

〔消毒法〕患者ノ分泌物及排泄物ハ二十倍石炭酸水ヲ注キテ嚴重ニ消毒シ一定ノ器中ニ投入シ然ル後焼却スヘシ。

落跡ハ密蓋アル容器中ニ石炭酸水ヲ入レ置キ此ノ中ニ投スヘシ。眼汁ニ因テ汚染セル衣服等ハ焼却スルヲ可トス。

室内一切ノ物品、看護者ノ身体、衣服等モ亦適宜ノ消毒法ヲ施行スヘシ。

### 第三

### 看護法

#### 看護法

看護者ハ屢々種痘ヲ經過セシ者ヲラサルヘカラス而シテ假令天然痘ヲ經過セシ者ト雖モ爾後久シキニ渉ル者ハ又種痘ヲ爲サ、ルヘカラス。

患者ハ清潔ナル室内ニ安臥セシメ精神恍惚タル者ハ安靜ナラシムルコトヲ努ムヘシ。

室内ハ日光ノ射入ヲ避ケンカ爲メ窓掛或ハ他ノ裝置ニ由テ光線ヲ遮キリ薄闇ナラシムヘシ是レ光線ハ本病ニ大ナル關係ヲ有シ化膿ヲ盛ナラシムルヲ以テナリ(本病ニハ赤色布ヲ好シテ俗間ニモ用ユルコトナルカベルツ博士モ嘗テ白江學士ニ告テ曰ク赤色布等ヲ以テ窓懸トナスハ光線ノ作用ニテ本症經過ニ良ナリトハ歐洲ニテモ永ク傳フ云々)

体温ノ上昇及頭痛ニ對シテハ頭部ニ冷卷法ヲ施シ氷片ヲ嚙下セシメ傍ヲ藥液ノ含嗽法ヲ行フヘシ。



患者ハ痒痛ニ堪ヘ難ク好シク爬搔スル者ナレハ之レカ爲メ爬潰セシメサル様注意スヘシ然ラサレハ癒後醜惡ノ瘢痕ヲ殘留セシムルニ至ル者ナリ小兒ニ在テハ手指ヲ布片ニ裹ミテ輕ク縛シ置キ或ハ止テ得ル時ハ緊縛シ置クヘシ。

飲食物

患部處置

〔飲食物〕 飲食物ハ何レモ輕味ノ流動物ヲ以テ之レニ充テラル、者ナレトモ一々醫師ノ指揮ニ從フヲ良トス。

〔患部ノ處置〕 患部ノ處置トシテハ軟膏ノ貼用或ハ糊劑、油劑ノ塗布等ヲ處セラル、コトアリ之レ瘢痕ヲ防禦スルカ爲メニシテ殊ニ顔面等ニ於テ使用セラル、コト多シ。

膏劑

〔膏劑〕 軟膏ハ通常「リンド」ニ展シ豫メ顔ノ大サニ切リ之レニ鼻孔、口、眼等ノ部ヲ剪リ抜キテ仮面帶トナシ貼用スヘシ又軀幹等ニ貼用スルニ當ツテハ「リント」或ハ木綿ヲ以テ褌裈、短胴服ノ如キ者ヲ作り之レニ軟膏ヲ展シテ用ユヘシ又糊劑ニ在テハ清潔ナル木綿或ハ麻布ニ浸シテ貼用スヘシ而シテ一日一回更新スルヲ要ス。

其他或ハ眼炎ヲ起シタル者ニ付テハ眼ノ處置等夫レノ命セラルヘ

シト雖トモ之レ等ハ凡テ醫士ノ命令ヲ待チテ然ル後施行スヘキ者トス。

瘡瘡看護法終



# 猩紅熱看護法

## 第一

### 發生及傳染經過

猩紅熱

猩紅熱モ亦觸接性傳染病ノ一ニシテ皮膚、毛髮ノ蒸發氣及空氣、器具、玩具、衣服、病室等ニ由リ傳染スル者ニシテ其速ナルコトハ暫時本病者ニ接スルモ尙能ク傳染スルト云フ多ク春秋ニ流行スト雖トモ本邦ニ於テハ稍ヤ稀ナリ。

患者ハ二歳以上十歳以下ノ小兒ニ多ク時トシテハ大人モ亦之レニ罹ル而シテ一回本症ヲ經過セル者ハ痲疹患者ニ於ケルカ如ク再ヒ感染スルコト鮮ナキ者ナリ。

潜伏期

〔潜伏期〕潜伏期ハ平均二日乃至四日ニシテ其間多少ノ遲速アリ。

症候

〔症候〕症候トシテハ輕度ノ全身違和ヲ覺フ次テ劇シキ惡寒、戰慄、搖擻ヲ來タシ体温上昇シテ四十度乃至其以上ニ騰リ嘔吐ヲ催シ頭痛、譫語シ精神恍惚トナリ咽頭ノ疼痛アリ扁桃腺及咽頭、軟口蓋ハ腫起シ發赤

合併症

シテ時ニハ實扶的里亞性ノ義膜ヲ附着シ脈搏疾速ニシテ一分間百廿乃至其以上ニ至リ体温高度ニ稽留シ嚔下困難及ヒ痲痺搖擻ヲ發シ尿量減少シ數日ナラスシテ頸部ニ猩紅色ノ斑点ヲ生シ漸次ニ胸部及ヒ顔面、四肢等ニ及ヒ次テ二三日ノ後猩紅色ノ斑点ハ變シテ蒼白色トナリ体温漸ク下降ノ狀ヲ呈シ前症狀モ稍ヤ緩解ニ赴キ頸部ノ疹皮ヨリ落屑ヲ始ム落屑ハ發生ノ順序ニ從フ者ニシテ四肢、胸部、頸部ノ如キハ大ナル板狀ノ落屑ヲ爲シ顔面ノ細微ナル者ハ糟糠狀ノ落屑ヲ爲シ体温下降シ他ノ諸症狀輕快シテ食慾進ニ二週間ノ後ニ至リ治癒スル者ナリ。

〔合併症〕經過中ニハ咽頭實扶的里亞、腎臟炎ヲ發スルコト多ク口内炎、嚔下困難等ヲ起シ又尿量減少シテ浮腫ヲ來タス等ニシテ危險ナル合併症トス。

豫防及消毒法

## 第二

### 豫防及消毒法

本症ニ對スル豫防及消毒法ハ前掲記載ノ他ノ觸接性傳染病ト異ルコト



トナシ。

### 第三 看護法

看護法

看護中特ニ注意ヲ要スルノ点ハ落屑時ニシテ疹皮甚ク剥落スル者ナレハ痘瘡ニ於ケルカ如ク一定ノ密蓋ヲ有スル器ヲ備ヘテ其中ニ集メ消毒藥ヲ注入シ置クヘシ又咽頭ノ症狀實扶的里亞ヲ兼スル者ナレハ唾液、咯痰及口内等モ亦實扶的里亞ト同様ノ處置ヲ要シ尿量ハ常ニ測量スヘシ又其量減少スル者ハ膀胱ヲ來スコト多キヲ以テ下肢等ハ注意シテ觀察スヘシ尿ハ成ル可ク蓄尿器中ニ貯ヘ置キテ醫師ノ檢尿ニ資スヘシ或ハ特ニ指命ナキ場合ト雖トモ蛋白ノ有無ヲ檢スルコトヲ得ハ最モ良シ。

注意

〔注意〕 本患者施療ノ際ハ咽頭塗布藥及ヒ其檢査ニ用ユル舌壓子、反射鏡ノ類ハ豫メ之レヲ具ヘ置クヘシ。皮膚ノ落屑時ニ於テハ其飛散ヲ豫防スルノ法トシテ華攝林ヲ塗布スヘシ其他或ル場合ニ於テ入浴ヲ許可セラル、コトアルヲ以テ此ノ時

ニ際シテハ能ク消毒法ノ項ヲ參照シ規定ノ通り行ハシメ且ツ注意ヲ要スヘキノ点ハ一々醫士ニ申稟シテ行フヘシ本症ハ通常他ノ症狀治癒スルモ落屑了ラサル間ハ未ダ全ク傳染ノ患ヘナキ者ト云フヘカラス。

猩紅熱看護法終



# 實扶的里亞看護法

## 第一

### 發生及傳染ノ經路

實扶的里亞

實扶的里亞ハ觸接性傳染病ニシテ流行ノ時期定マラサレトモ冬期ナ  
以テ最モ多シトス特ニ人煙稠密ナル都會ニ於テ屢々流行スル危險ナ  
ル小兒病ニシテ時トシテハ壯年者モ亦之レニ侵サル、コトナキニ非  
サレトモ比較的稀ニシテ且危險渺ナク老人ハ殆ント感染スルコト鮮  
ナシ殊ニ營養不給ナル貧家ノ小兒或ハ腺病質ノ小兒ハ感染シ易ク且  
ツ最モ危險ナラス。

病毒

〔病毒〕 病毒ハ之レニ觸接スルカ或ハ衣服、器具、玩具等ニ附着セル者ヨ  
リ吸氣ヲ介シテ口腔ニ入り咽頭粘膜或ハ其近傍ノ粘膜ニ附着シ發育  
シテ其部ノ腫起及炎病ヲ起シ或ハ義膜ヲ附着シ毒質ノ吸狀ニ由テ發  
熱シ或ハ他ノ全身症狀ヲ發シ体外ニ排出セラル、ハ咯痰及唾液、義膜  
ノ咯出、鼻汁及呼氣ニ由ル者トス故ニ此レ等ノ物ニ接觸シ又ハ吸收ス

潜伏期

ル時ハ直チニ本病ヲ感染スヘシ。  
〔潜伏期〕 二日乃至五日ニシテ一週以上ニ亘ル者ナシ。

前驅症

〔前驅症〕 全身ノ違和、頭痛、咽頭痛、輕キ咳嗽、及聲啞、哺乳困難トナル等  
ニシテ一、二日ノ後惡寒發熱スル者ナリ。

症候

〔症候〕 小兒殊ニ二歳以下ノ者ハ言語ニ由テ能ク其病狀ヲ母ニ告グル  
コト能ハサルヲ以テ前驅症ハ往々不注意ニ看過スルコト多シ。  
其初メ小兒ハ倦怠ノ狀ヲ呈シ咽頭痛、頭痛ヲ覺ヘ音聲啞嘶シ犬吠様ノ  
咳嗽ヲ發シ喉頭部狹窄セルカ如ク呼吸ハ稍ヤ困難トナリ脈搏疾速、体  
温上昇シ咽頭扁桃腺ハ赤色ニ腫脹シ其面ニ灰白色ノ点狀ノ義膜ヲ附  
着シ頸部ノ水脈腺腫脹ス而シテ義膜ハ漸々蔓延廣大シ軟口蓋及全口  
腔又ハ鼻腔ニ及フコトアリ其下部ニ垂延スル者ハ喉頭、氣管ニ及ヒ吸  
氣ノトキ喉頭部ニ笛聲ヲ發シ遠町ニ在テモ咽頭ノ狹窄ヲ容易ニ知リ  
得ル如ク音聲全ク啞嘶シ胸尖ハ吸氣時ニ於テ陷沒甚ク顔面蒼白  
色トナリ口唇、チヤノーセ「ヲ呈シ悶苦惱煩シ應急ノ處置ヲ施サ、レハ  
終ニ窒息スルニ至ル。



輕症

〔輕症〕輕症患者ハ數日ノ後チ義膜漸々消剝シ音聲次第ニ恢復シ体温下降シテ快癒ニ至ル者ナリ然レトモ往々經過中腎臟炎、肺炎、氣管支炎咽頭ノ痲痺、或ハ四肢ノ痲痺等ヲ發スルコトアリ。

豫防及消毒

〔豫防及消毒〕患兒ハ速カニ他ノ健康兒ト隔離シ交通ヲ禁スヘシ。患者居室内ノ器具、物品其他ハ各適宜ノ消毒ヲ行フヘシ又患者ノ咯痰及鼻汁、唾液、義膜等ハ必ラス痰器中ニ入レ密蓋シ充分ニ二十倍石炭酸水ヲ注キ置クヘシ又之レ等ノ附着セル紙布片等ハ悉皆燒棄スルヲ可トス診斷時ニ使用セヨレタル咽頭塗布筆、舌壓子等ハ毎回二十倍石炭酸水ヲ以テ洗滌消毒スヘシ決シテ未消毒ノ儘他患者ニ使用スヘカラス。

看護者ハ成ルヘク患者ノ咯痰及義膜ヲ直接面部ニ蒙ラサル操努ムヘシ若シ咯痰ニ由テ自己ノ顔面ヲ汚シタル時ハ必ラス石炭酸水等ヲ以テ之レヲ洗去スヘシ又眼、鼻、口ノ粘膜等ニ咯痰ノ附着スル時ハ直チニ感染スル者ナレハ極メテ注意スヘシ若シ誤テ口腔内ニ入りタル時ハ必ラス消毒的ノ含嗽藥ヲ以テ能ク含嗽スヘシ最モ危險ナルハ患者ノ

第一 看護法

看護法

氣管被開時ニ於テ被開ト共ニ義膜ノ噴出スルコトナリ之レカ爲メ往々感染シタル例又々鮮ナカラス。

患者ハ清潔ニシテ餘リ寒冷ナラサル室ニ平臥セシメ安侍スヘシ空氣ノ乾燥ハ宜シカラサルヲ以テ常ニ水蒸氣ヲ發散セシメテ稍ヤ濕氣ヲ保クシムヘシ而シテ頭痛又ハ高熱ノ者ハ頭部ニ冷卷法ヲ施シ成ルヘク義膜ノ咯出及剝離ヲ努ムヘシ義膜ハ容易ニ剝離スル者ト然ラサル者トアルモ決シテ強キ力ヲ用ユヘカラス又屢々口腔内ニ粘液ノ滯留スル者ヲ拭去スヘキ者トス即チ麥粒鉗子ニ脫脂棉花ヲ鉗ミ靜カニ口内ニ挿入シテ拭去スヘシ義膜ヲ剝離スルニモ此ノ方法ヲ以テスルヲ可トス然レモ含嗽シ得ル者ニ在テハ數次藥液ヲ以テ含嗽セシメ或ハ吸入法ヲ行フヘシ。

呼吸ノ困難甚タシク顔面蒼白、脈搏細微トナリタル時ハ窒息スル者ナレハ速カニ醫士ニ報告シテ處置ヲ乞フヘシ經過中下肢其他ニ浮腫ヲ



醫療ノ處置

氣管截開

カニユーレ

來シタル時ハ腎臟炎ヲ併發スル者ナレハ兼テ尿量ヲ測定シ置クヘシ。

〔醫療ノ處置〕本患者醫療ノ處置トシテハ藥液ノ蒸氣吸入、頸部ノ濕巻法或ハ冷巻法、咽頭腐蝕藥塗布、血清注射、氣管截開等ニシテ咽頭塗布、血清注射、氣管截開ヲ除クノ外ハ看護者ニ之レカ施行ヲ命セラル、者ナリ。

〔氣管截開〕重症ニシテ血清療法ヲ施スモ奏効セサル時ハ氣管截開ヲ施シ一時人工的ニ此ノ處ヨリ呼吸ヲ營マシメテ患者ノ窒息スルヲ防止ス。

即チ氣管ヲ截開シ氣管「カニユーレ」ヲ挿入シ此ノ管ニ由テ呼吸セシムル者ナリ。

〔カニユーレ〕二重ノ金屬管或ハ硬護膜ヨリ成リ内管ハ裝置ニ由テ屢々取り除クニ便ナラシム。

挿入後ハ一層注意シテ看護スルヲ要スル者ニシテ頻々鳥毛ヲ以テ管中ニ挿入シ管壁ニ喀痰、義膜ノ附着スルヲ防クヘシ然ラサレハ管孔ヲ

咽喉塗布

閉塞シ終ニ死亡セシムルニ至ルヘシ。

鳥毛ヲ挿入スル時ハ刺戟ニ由テ咳嗽ヲ發シ喀痰及義膜ヲ管孔外ニ噴出スル者ナリ此ノ時看護者ハ注意シテ自己ノ面部ヲ汚染セサルヲ努メ又他ニ飛散附着スルヲ防カンカ爲メニ管口ノ傍ヲ約五六寸ノ外ニ消毒藥ヲ浸シタル「ガーゼ」ヲ展張シ之レニ由テ他ニ飛着スルヲ防クコトヲ得ヘシ管口ニハ常ニ硼酸水ニ浸シタル一二層ノ「ガーゼ」ヲ覆ヒテ空氣中ノ塵埃ノ散入スルヲ防キ且ツ常ニ濕氣ニ保タシメシカ爲メ室内ニハ蒸氣スプレーヲ用ヒテ水蒸氣ヲ發散セシメ又室内ノ溫度ニ注意シ急ニ變異セシムヘカラス尙戸障ノ間隙ヨリ透入スル冷風ヲ避ケ温暖ナラシメ成ルヘク清潔ナル空氣ヲ室内ニ導クベシ。

〔咽喉塗布〕咽喉塗布ハ常ニ行ハル、法ニシテ塗布用ノ毛筆ヲ用ニ此ノ法ハ一般ニ患兒ノ嫌厭スル者ナレモ能ク其母ニ諭シテ之レヲ行フノ機會ヲ與ヘシムルコトヲ務ムヘシ患兒ハ嫌厭シテ啼泣スルノ際開口スルヲ以テ看護者ハ頭首ヲ捉定シ其間ニ速ク塗布スヘシ此ノ法ハ豫メ患兒ノ習慣ヲ涵ヒ置キ行ヒ易カラシムルコトヲ要ス。



血清療法

〔血清療法〕實扶的里亞ハ小兒病中最ヒ危險ナル疾病ニシテ往古醫術ノ未ダ進歩セザリシ頃ハ本病ニ犯サルハ患兒ハ其過半ヲ失ヒシ者ナレトモ細菌學ノ進歩ニ從ヒ完全ナル血清療法ノ發見セラレタル以來ハ治療ニ時ヲ失ヒタル者カ又ハ危險ナル合併症ヲ發シタル者ニ非サレハ概ネ良好ノ結果ヲ得サルコトナキニ至レリ。

血清ハ各症ニ應シテ一、二、三號等ヲ注入スル者ナレハ醫療ヲ受ケントスル者若シクハ入院スル者アル時ハ看護者ハ注射器及其他注射ニ要スヘキ一切ノ準備ヲ整ヘ置クヘレ。

消毒藥

〔消毒藥〕消毒藥トシテハ5%石炭酸水〇.5%石炭酸水アルコホル脱脂糖ガ―セコロゾール上絆創膏等トス此レ等ノ藥物ハ常ニ取揃ヘ置キテ何時使用スルモ毫モ差支ナキ様ニ爲シ置キ之レト同時ニ咽頭塗布藥、塗布筆、舌厭子、反射鏡、開口器、麥粒鉗子、可檢物容器、含嗽藥、唾壺等ヲモ準備スルヲ要ス。

實扶的里亞看護法終

百斯篤病看護法

第一

發生及傳染經路

百斯篤

百斯篤ハ一ニ黒死病ト稱シ觸接性傳染病中ノ最モ猛惡ナル疾病ニシテ西曆五百四十年頃ニ始メテ東亞細亞ヨリ歐羅巴ニ侵入シ第一回ノ流行ヲ來タセシトアリシモ幸ニシテ全滅ニ歸シ只其ノ歐チ醫學史上ニ印スルニ過キス而シテ其全滅ノ原因ニ就テハ豫防消毒ノ完全ナルニ在リシカ果ク天時ニ出テシカ稽フル能ハス數年前ニ於テ香港及ボノベイノ各地方ニ大ヒニ流行シ爲メニ十數萬ノ死者ヲ出シタルトアリ近年我カ新版圖臺灣島ニモ已ニ數年前ヨリ發生セリ斯病ハ概シテ夏季ニ於テハ一時終熄シ冬春ノ候ニ至リテ再ヒ流行スルヲ常トス而シテ其多クハ下等人民ナルモ往々内地人ニシテ之レニ犯サル、者アリト云フ其他支那ノ北部、牛莊、蒙古等ノ各地方ニモ亦此ノ病アルトテ發見セリ然レトモ幸ニ其當時ハ我カ内地ニ於テ此ノ疾病ノ發生ヲ見



カリシ最モ其ノ間往々該病患者ヲ載セタル船舶ノ長崎、横濱、神戸ノ如キ交通頻繁ナル港灣ニ來リシコトアリシモ檢疫ノ嚴密ナルカ爲メ一昨秋(明治三十三年)ニ至ル迄ハ之レカ侵襲ヲ免レタリキ然ルニ俄然同年十月初旬神戸葺合村ニ於テ一人ノ本病患者ヲ發生シ爾後村内ニ傳播シテ終ニ二十餘人ノ患者ヲ出シタル後漸ク全滅セリ(潜伏セルカ否ヤ今尙ホ確証シ難シ)越ヘテ同年十一月廿九日ニ至リ突然大阪ノ中樞部ニ一人ノ同病者ヲ生シ爾來同市内ノ處々ニ散發シ昨年(明治三十三年)夏季ニ至ルマテ殆ント百名ニ近キ死者ヲ出スニ至レリ斯病ノ始メテ神戸ニ發生セシ時ノ如キ當路者ノ苦心ハ例フルニ物ナク日夜ニ盡粹シ防疫ニ檢疫ニ燒拂ニ有ラユル方法ヲ盡クシテ間然スル所ナカリシモ遂ニ之レヲシテ大阪ニ逸セシムルノ不幸ヲ見ルニ至レリ。

斯病ノ初メテ神戸ニ侵入ノ原因ニ付テハ或ル者ハ牛莊ヨリ輸入セシ雜穀、油槽ノ類ニ在リシト云ヒ或ル者ハ香港ヨリセシ棉花ニ在リシト云フモ果シテ熱レカ確カナルヤ未タ之レヲ詳ニセス其大阪ニ發生セシ者ニ付テ考フルモ初患者ノ如キハ神戸ニ交通セルカ爲メ感受セリ

ト云フヘキ証左ナク殆ント其經路ヲ確カムルニ迷ヘル者ノ如シ。

近年(明治三十三年)病毒ハ又和歌山地方ノ海岸湯淺町ニ運搬セラレ稍ヤ蔓延ノ勢ヲ表ハシタルコトアリキ此ノ如ク斯病ノ發生ハ漸ク時昔ニ在ルヲ以テ當路者ト雖トモ稍ヤ實驗ニ乏シキ者ニ似タリ況ンヤ此レニ用ユル藥品ノ如キニ至リテハ其經驗皆無ニシテ當初殆ント困難ヲ極メタリト云フ。

病毒ハ固有ノ桿菌ニシテ往年斯病ノ香港ニ發生セシ時有名ナル細菌學者北里博士ハ一ノ病原菌ヲ發見シ以テ百斯篤ノ病原菌ト爲セリ之レト同時ニ佛國ノ派遣醫イエルザン氏モ亦別ニ一ノ細菌ヲ發見シ以テ百斯篤ノ病原菌ナリト主張シ兩者互ニ説ヲ爲セリト雖トモ現説ハエルザン氏菌ニ贊同ヲ表スル人多シト云フ。

要スルニ本病ハ一ツノ病原的細菌ニ由テ傳播スルコト尙他ノ傳染病ニ於ケルカ如シ而テ其占住地ハ腺百斯篤ニ於テハ腫脹腺ノ内溶液中或ハ其近傍ノ全腺内ニ遂ニハ尿、血液、腸、肺臟、咯痰、唾液時トシテハ咽頭ノ分泌液及ヒ義膜、眼ノ涙液、眼ノ分泌物等ニ於テモ亦病原菌ノ檢出サ







腺腫百斯篤ニ在テハ体温昇騰後或ハ其前ニ當ツテ身体ノ諸腺(鼠蹊腺、腋窩腺、頸腺、耳下腺、顎下腺等)ニ疼痛ヲ訴ヘ腫起ス腺ハ知覺過敏ニシテ輕キ壓迫ニモ甚クシキ劇痛ヲ訴ヘ時ヲ經ルニ從ツテ數ヶ處或ハ其他ノ部位ニ及ホスコトアリ全身ニ就テノ体温ハ三十九度若シクハ四十九度ニ稽留シ脈搏疾速トナリテ百乃至百二十以上ニ達シ舌ハ于白苔ヲ生シ口唇咽喉ノ乾燥強ク煩渴飲引嘔吐惡心食思欠乏強頭痛腺疼痛等アリテ身体勞疲シ心神不安苦悶シ不眠精神興奮眼險血膜充血シ眼光炯々トシテ特異ノ光澤ヲ放チ精神朦朧譫語或ハ重聽シ應答明瞭ナラス屢々惡寒ヲ反覆スルコトアリ又精神涸濁シ人事不省トナル者ハ譫妄躁狂、癲暴シテ或ハ直立シ或ハ跪坐シ脫床シ飛奔シ若シクハ大聲ヲ發シテ怒詈シ狂噪スル者アリ。

尿量

〔尿量〕尿量ハ減少シテ濃厚トナリ或ハ下痢シ或ハ便秘ス。發熱後三四日ニシテ症狀益々増進シ甚クハ癲暴シ若シクハ嗜眠ノ狀ニ陥リ高温稽留、脈搏微弱トナリ呼吸促進シ四肢ノ末端「チヤノーゼ」ヲ呈シ腺ノ腫脹増大シ疼痛劇甚ニシテ精神稍ヤ涸濁シ應答稍ヤ明チ

欠クト雖トモ觸接スレハ尙能ク顔面ヲ蠕縮シ皮膚ハ隆起シテ僅カニ發赤シ或ハ然ラサル者アリ暫クシテ症狀愈々險惡ヲ呈シ數次痙攣ヲ起シ眼球上竄シ口吻閉鎖手指緊握シ顔面、口唇「チヤノーゼ」或ハ稍ヤ紫色ヲ帶ヒ痙攣ヲ以テ終ニ死亡スル者アリ或ハ半眠半醒ノ狀ニ於テ死亡スル者アリ死亡後ハ死体ノ硬直速カニ來リ且ツ強クシテ口唇、頸、胸ノ各部及上膊ノ内面股等ニハ紫紅色ノ斑ヲ生ス重症ニ在テハ十中八九ハ發生後二三日乃至四五日ニシテ死亡ス。

輕症者ニ在テハ只前記ノ諸症狀稍ヤ輕度ナルノミ一週乃至二週間ニシテ快復ニ赴キ諸症狀漸ク輕快シ(多量ノ發汗アルモノハ最モ佳良ノ徵ナリ)脈數ト共ニ体温漸ク下降シ腺ノ腫脹硬結稍ヤ軟弛シ疼痛隨テ減シ化膿ニ傾ク而シテ其化膿時ハ体温再ヒ稍ヤ上昇ス次之テ食思振ヒ次第ニ佳良ノ徵ヲ呈スヘシ腺腫ノ部位ハ多ク末梢侵入部ニ近キ腺ヲ侵ス者トス即チ右下肢ニ在テハ右股腺或ハ鼠蹊腺、左下肢ニ在テハ左股腺或ハ鼠蹊腺ヲ侵シ手指ニ在テハ同側ノ腋窩腺等ニ於ケルカ如シ而シテ中ニハ左右ノ兩部腫脹ヲ來ス者アリ或ハ一部ニ止ルコトアリ



リ或ハ一人ニシテ兩股鼠蹊腋窩腺腫等ヲ兼ヌル者アリ或ハ其初メ一  
ケ處ニシテ漸ク他ニ及ホス者等アリ之レ侵入吸收ノ經路ニ由ルモノ  
トス。

(附言) 著者カ嘗テ大阪桃山病院ニ於テ看護セシ百斯篤患者二十餘  
人ノ中全治セル或ル一人ハ上記ノ各腺何レモ腫起シ頸圍ニ七八個  
左右腋窩ノ各腺ニ約十有餘個ヲ有シタリキ而シテ患者ハ略ホ前記  
ノ症狀ヲ起シ發病數日ニシテ精神朦朧夜中密カニ離床シ枕ヲ抱イ  
テ室外ニ出テントス就イテ其ノ故ヲ問ベハ即チ曰ク頃刻某アリ來  
テ共ニ他ニ去ラント云ヘリト云フ處更ラニ正潮ナラス十日前後ニ  
シテ病狀稍ヤ輕快シ腺腫化膿セシヲ以ツテ切開サレタリシニ爾後  
經過緩慢ニシテ肉芽面良佳ナラス二ヶ月餘ニシテ漸ク全治退院セ  
リ。

厥餘ノ患者ハ入院時既ニ危篤ノ症狀ヲ表ハシ數時間ニシテ死亡シ  
或ハ三四日乃至五日ニシテ醫療効ナク悉ク死亡セリ。

肺百斯篤

〔肺百斯篤〕 一ニ百斯篤肺炎ト云フ稀有ニ屬スル疾惡ニシテ汎ク之レ

ヲ統系ニ徵スルモ本病ニシテ全治シタル者ハ極メテ少ナシト云フ。

(附言) 著者ハ敢テ本説ヲ駁スル者ニ非スト雖トモ著者ガ大阪桃山  
病院ニ於テ看護セシ百斯篤患者二十四名ノ内ニ於テ本病者十餘名  
ニ達シ殆ント其半數ヲ占メシニ由テ見レハ率口稀有ニ非スシテ反  
ツテ其多キニ居ルハ或ハ特ニ大阪ニ於テノニ然リシナランカ。

病狀ハ概畧肺炎ニ於ケルト大差ナク先ツ身体ノ違和ヲ來シ疲勞ヲ覺  
ヘ食慾稍ヤ欠損シ惡寒シ時々咳嗽アリ体温四十度乃至四十度以上ニ  
稽留シ脈搏疾速ニシテ弱ク皮膚顔面ハ蒼白色又ハ穢煤色ヲ呈シ舌苔  
ヲ生シ口唇乾燥四肢ノ末端「チヤノ」セ「チ」呈シ末期ニハ呼吸促進シテ  
不利困難ニ胸痛ヲ訴ヘ胸内ノ苦悶頭痛アリ時トシテハ嘔氣惡心嘔吐  
ヲ覺ユ其終期ニ及ヒ下痢スル者アリ眼結膜ノ充血ハ腺百斯篤ニ於ケ  
ルカ如ク著ルシカラス時々咳嗽咯痰アリ又ハ咯痰頻發シ咯痰多量ナ  
ル者アリ病性初メハ泡沫狀ノ稀釋痰ヲ咯出シ漸次増進スルニ從ヒ血  
液ヲ混シ時トシテハ咯血スルコトアリ或ハ鏽色性桃紅色痰ヲ咯出ス  
而シテ胸内ノ苦悶及ヒ呼吸促進至全身ノ疲勞ハ他類似症ニ比セハ急速



増劇シ其苦惱ノ狀見ルニ忍ビス氣息奄々トシテ轉々反側ス脈搏ハ微弱トナリ四肢厥冷シ口唇顔面ト同シクチヤノ「ゼ」ヲ呈シ虚脱ノ狀ニ於テ死亡スル者アリ或ハ苦悶中心臟痲痺ヲ以テ倒ル、者アリ時トシテハ痙攣ノ發作ニ由リテ死亡スル者アリ此ノ時ニ在テハ眼球ノ上鼠、手指ノ緊握等腺百斯篤ニ於ケルト異ナラス。

腺百斯篤ニ於テハ多ク重症腦症狀ヲ兼ヌレトモ肺百斯篤ニ於テハ精神依然トシテ明瞭ニ應答精確ナリ只呼吸ノ促進ニ由テ談話困難ナルノミ瀕死時ニ於テハ稍ヤ精神朦朧トナリ譫語スル者アリト雖トモ多クハ絶息前數分間ニ於テモ尙精神確乎タルカ如シ肺百斯篤ニシテ腺腫百斯篤ヲ兼ヌル者アリ又ハ腺腫百斯篤ニシテ後チ肺百斯篤ヲ兼ヌル者アリ。

此他眼ノ百斯篤ニ在リテハ結膜炎ノ症狀ヲ發シ眼瞼發赤腫脹シ稍ヤ潤潤セル濃厚ノ分泌物或ハ血液ヲ混和シ百斯篤菌ヲ含蓄ス。

## 第二 豫防法

### 豫防法

### 家鼠

### 鼯鼠

### 家屋

個人的豫防法トシテハ他傳染病ニ於ケルカ如ク流行地ニ接近セズ專ヲ攝養ヲ重シ清潔法ヲ勵行シ殊ニ皮膚ヲ損傷セサルコトヲ努メ足袋ヲ穿テ決シテ徒跣ニテ歩行スヘカラス。

許販ノ如キ者ヲ生スル時ハ直チニ適宜ノ法方ヲ施シ治療セシムヘシ決シテ細微ノ傷創ナリトモ輕々看過スヘカラス皮膚ノ粗糙トナリ易キ者ハ豫メ防腐藥含有ノ虞里斯林、華攝林等ヲ塗布シ清潔ニ保ツヘシ、

〔家鼠〕家鼠ハ百斯篤ニ感シ易ク危險ナル媒介者ナレハ宜敷此レカ驅除策ヲ講セサルヘカラス。

鼯死セル家鼠ヲ發見セル場合ニ於テハ最モ危險ヲ惹起スルコトアレハ警戒注意セサルヘカラス家鼠ノ故ナク死スル者ニハ往々百斯篤菌ヲ發見スルコトアレハナリ。

〔鼯鼠〕鼯鼠体ニハ決シテ手ヲ以テ觸ルヘカラス又ハ塵埃溜等ニ放棄セステ焼却スヘシ流行時ニ於テ鼯鼠ヲ發見シタル時ハ其旨直チニ警察署ニ申告シ此レカ置處ヲ爲スヘシ。

〔家屋〕家屋ハ屢々大清潔法ヲ施行シ床下等ノ如ク濕潤シ易ク且ツ日



看護者

看護者ノ適否

光ノ透射セサル處等ハ石灰末ヲ撒布スヘシ。  
 〔看護者〕直接ニ患者ニ接セサルヘカラサル看護者ハ極メテ危険ナリ何トナレハ感染ノ経路ニ付テハ未タ定説ナキノミナラス之レカ豫防ノ方法ニ就テモ今尙攻究中ニ属スルヲ以テナリ從來當路看護者ニ非サル家人ニシテ直接看護ニ從事シタリシ者ハ一人トシテ之レニ感セヨリ見レハ到底感染ヲ免カルヘカラサル者ト思ハサルヘカラス偶々其ノ此レヲ免カル、ハ畢竟天運ト謂ツヘキノミ。  
 〔看護者ノ適否〕本病ノ看護ニ從事セント欲スル者ハ須ラク左ノ數項ニ注意スヘシ然ラサレハ自カラ火中ニ投スルカ如キノミナラス併セテ病毒ノ傳染ヲ媒介スルノ嫌ヒアルヲ以テナリ。  
 (一) 身体羸弱ニシテ皮膚ノ抵抗力薄弱ナル者又ハ肝臓、創傷等アル者ハ看護ニ從事スルニ適セス  
 (二) 不注意怠慢ニシテ遺漏失策多キ者モ亦同シ。  
 (三) 成ルヘク免疫質即チ人工免疫法ノ施行ヲ受ケタル者ヲ最モ安全

ナリトス。

(四) 自家ノ攝養ヲ怠タラス日々入浴シテ皮膚ヲ愛護シ易メテ粗鬆トナラサル様注意スヘシ。

看護者ハ消毒藥殊ニ5% 石炭酸水0.1% 昇汞水ノ如キ消毒藥ヲ常用スルカ故ニ皮膚粗鬆トナリ易ケレハ深ク注意スヘシ白江醫學士ノ稱揚セラレタル3% リゾール華攝林ヲ消毒後ニ塗擦スル時ハ之レヲ防キ得ルノミナラス又能ク汚染スルヲ防クヲ以テ太ニ安全ナリ。  
 肺百斯篤患者ノ如ク咳嗽咯痰アル者ノ看護ニ從事スル者ハ呼吸器ヲ用ヒ脱脂綿ヲ「ガーゼ」ニ包ミタル者ヲ其内面ニ貼シ屢々交換スヘシ鼻孔ニハ脱脂綿花ヲ填充シ又數次更新シ尙防腐的含嗽劑ヲ以テ含嗽スヘシ患者ノ咳嗽スル時ハ唾液、痰末等飛散シテ最モ危険ナレハ注意シテ直接眼球ニ觸レシムヘカラス若シ必要ノ場合ニ在テハ眼鏡ヲ用ユヘシ。  
 〔醫員回診時ノ豫防注意〕醫員診察ノ際殊ニ胸部ヲ聽診スル時等ニ於テハ大ヒニ危険ナル者ナレハ注意シテ患者ヲ醫師ノ反對ノ側

醫員回診時ノ豫防注意



ニ向カシメ置クヲ要ス又咳嗽ニ由テ咯痰及唾液ヲ飛散スル場合ニハ「ガーゼ」或ハ布片ノ類ニ石炭酸水或ハ「メソヂ」水等ヲ浸シ實扶的里亞患者ノ氣管切開時ニ於ケル如ク口外ニ翳シテ以テ其飛散ヲ防クヘシ患者診察時ノ如キハ看護者ニ於テ注意加護セサレハ醫師其レ自カラニ於テハ防禦スルコト能ハサル者ナレハ最モ看護者ノ傾意ヲ要スル所ナリトス。

(附言) 著者按スルニ向キニ不幸ニシテ本病ノ爲メ斃レタル大阪府檢疫醫馬場碩一君ノ如キモ其初メ患者ヲ診察スルノ際當路看護者ノ如ク他人ニ於テ注意加護シタラシムニハ或ハ感染ヲ免カレタルナラシカ惜シムヘキナリ要スルニ醫師ノ患者ニ對スルヤ至情ヲ以テシ懇切慰懃如何ニ危険ナル場合ト雖モ決シテ之レガ爲メ躊躇逡巡スルコトナケレハ患者モ其意ヲ体シ能フダケ自カラ注意セシコトヲ望ム。

咳嗽時ニハ普通ノ禮トシテ反對ノ側ニ向ヒ或ハ手巾等ヲ以テ口ヲ覆フ等ノコトアル者ナレトモ苦惱ノ時ニ在テハ倒底之レヲ守ルコト能

ハサル者ナレハ看護者トシテ側ニ侍スル者ハ能ク此ノ邊ニ注意スヘシ

### 第三 消毒法

#### 消毒法

百斯篤患者ニ對スル消毒ハ最モ嚴密慎重ニ施行スヘキ者トス。病毒ハ肺百斯篤患者ニ在テハ呼吸器ノ分泌物即チ咯痰、唾液、鼻汁中ニ又々腺百斯篤ニ在テハ腺ノ淋區液及ヒ血液中心ニ眼百斯篤ニ在テハ眼ノ分泌物、涙液中ニ含蓄ス其他腸百斯篤患者ニ在テハ排泄物中ニ混在スヘク又々敗血症ヲ起シタル者ニ在テハ全身一般ノ排泄分泌物中ニ混在スヘキ者ナリ。

看護者ハ豫メ一切ノ排泄分泌物ニ對シテ充分ナル消毒法ヲ施スヲ以テ安全ナリトス又之等ニ汚染セル一切ノ物品ニ對シテモ消毒法ヲ施スコト尙他傳染病ト異ル處ナシ。肺百斯篤患者ノ室内ニハ常ニ蒸氣「スプレー」ノ如キ消毒藥液ノ蒸散飛揚法ヲ行ヒ以テ空氣ノ乾燥ト塵埃ノ飛散トヲ防クヘシ白江醫學士ノ



處方「メントールエーテル」水及ヒ石炭酸水ハ消毒ト防臭トヲ兼タル最モ良好ナル藥液ナリ其他注意シテ室内ノ換氣法ヲ勵行スヘシ。

### 第四 看護法

#### 看護法

看護法ハ他傳染性ノ急性熱性病ニ於ケル者ヲ應用スヘシ而シテ其腺百斯篤ニ在テハ腺腫ノ化膿ニ傾ク時若シクハ早ク其初期ニ於テ截開或ハ摘出術ヲ施サルヘキヲ以テ此場合ニ於テハ亦他ノ外科的手術ト同様ノ準備ヲ爲スコトヲ要ス。  
血清療法ハ屢々行ハルヘシ。  
本患發病ノ當時及ヒ入院ノ際ニ於テハ腺穿刺術ヲ行ハル、モノナレハ兼テ其準備ヲ爲スヘシ即チ數個ノ滅菌シヤール及試驗管、採膿針、五立方仙迷突ノ内容ヲ有スル血清注射器、「コロシユム」防腐綑帶、材料血液ノ採收用ニ供スル滅菌試驗管、小刀、注射器、綑帶等ナリ其他体力ヲ維持シ兼テ心臟ノ衰脱ヲ防クノ目的ヲ以テ種々ナル興奮劑ヲ投セラル、ヲ常トスルカ故ニ看護者ニ於テモ亦其意ヲ諒シ自己ノ職務ノ範圍内

ニ於テ機ニ臨ミ變ニ應シ以テ已レカ伎倆ヲ活用セサルヘカラス。



百斯篤病看護法終



# 一般看護上ノ注意

(著者云フ左ノ一節ハ白江醫學士ノ寄贈ニ係ル大阪市立桃山病院百斯篤患者ニ就テテウ一書冊中ヨリ抜粹シタル者ニシテ本病看護上極メテ趣味アル事項ナルヲ以テ爰ニ轉載スルコトナシヌ)

(前略)入院シ來ル患者ハ自動的ニアラステ法律上ノ制規ニ制セラレ不快滿心ノ他働的來院者ナレハ心中請願的ニ來リタル患者トハ最初ヨリ大ニ異ル点アリ取扱治療病室整備看護巡診ノ各点ニモ普通病院ノ層倍ニ注意ヲ行ヒ且ツ可成的食品滋養物ノ満足ヲ與フルコトヲ主トセサルヘカラス之ヲ盡スモ尙ホ先入心ノ不快ハ満足ヲ表セサルヲ常トス況ンヤ患者中八分ハ事理不明ノ下等貧民ニシテ本院ヲ設立シアルハ生等人民ノ力ニ原クナドト暴言ヲ憚ラスシテ不平ヲ訴フルモノ少ナカラサルニ於テオヤ來院時既ニ不平ヲ以テ充タサル且ツ内心ハ常ニ耳ニヒシ恐ルヘキ百斯篤ニ犯サレタルヲラント期シツ、護

送サレ來ルモノナレハ特ニ婦人ノ如キニ對シテハ反覆慰諭法ヲ設ケ後チ初メテ親診セサレハ眞ノ現症ヲ誤認スルコト少ナカラサルヘン云々

如上ノ注意ヲ一讀セハ吾人看護婦タルモノ果シテ己レノ職務ノ上ニ就テ如何ナル感カ起ル豈勉メサルヘケンヤ。由來避病院ハ世人ノ概念業ニ已ニ悲惨ノ闇黒場裡トシテ深ク腦底ニ印セラレタリシモ近年ニ至リ漸ク其迷想ヲ打破シタルカ如シト雖モ尙ホ下層社界ノ事理ヲ解セサル者ニ至ツテハ依然トシテ此ノ迷想ヲ脱スル能ハスレテ服藥スラ之レヲ斥ケテ曰ク是レ恐テクハ余等ノ生命ヲ斷ツ毒藥ナラント慰諭百端スルモ尙ホ了釋セサル者アルハ吾人ノ疑々目撃スル處ナリ其愚笑フヘシト雖トモ抑モ亦憐レムヘキナリ在院日既ニ久シク其待遇ノ懇切ナルヲ見ルニ及ンテ迷夢漸ク醒メ頻リニ前日ノ暴言ヲ謝シ初メテ悔意ヲ表スルニ至ル況ンヤ百斯篤ノ如キ一タヒ其拿フル處トナラソカ復タ生ヲ期スヘカラス送院ノ別レハ即チ死別ヲ兼スル者タルニ於テオヤ由之觀之看護者ハ單ニ醫療ヲ輔



佐シテ回生ナ期スルノミヲ以テ足レリトスル者ニ非スレテ病者ノ漸ク將ニ天國ニ近カントスルニ及ンテハ須ラク慰慰愛憐只管ヲ甘臥スルノ法ヲ講セサルヘカラサルナリ之レ看護ノ最モ秘術トスル所ナリ。看護婦ノ患者ニ對スルハ至情誠意恰カモ骨肉ノ親子ニ於ケルカ如クナラサレハ決シテ其實ヲ擧クルコト能ハサル者ナリ著者常ニ惟フ看護婦ノ最大要素ハ即チ慈愛ノ二字ニ外ナラス之レヲ有形的ニ發動セシムル者即チ看護婦ナリ故ニ慈悲ヲケレハ看護婦ハ只一ノ器械ノミ寧ロ之レ無キニ如カス看護婦ノ品騰高潔ヲ崇フ所以蓋シ又此ニ外ナラサルナリ。

病勢頑惡不治ノ難症ニシテ醫藥應セス治療ノ施スニ由ナキモノニ至ツテハ煩苦呻吟シテ轉々反側シ其狀見ルコ忍ヒサル者アリ然レトモ傳染病ニ在テハ嚴ニ法規ニ制セラル、ヲ以テ一人ノ來テ此ノ苦悶ヲ頼ツヘキ者ナシ豈又悲シカラストセシヤ。

一般病者ノ臨終ニ際シテハ精神ノ慰安ナラサルハ蓋シ基因スル處アルヲ以テナリ救之シテ精神潤濁人事不者ナル者ハ既ニ苦痛ヲ感セス

ト雖トモ末期尙神心ノ耗消セサル者ニ在テハ其慘狀決シテ筆紙ノ能ク盡ス處ニ非ス著者ノ嘗テ桃山病院ニ在ルノ日一病婦先キニ其両親姉妹ヲ肺百斯篤ノ爲メニ奪ハレ後チ終ニ之レヲ己レニ感受セシ者アリ其死前數刻ニ於テ苦悶極リナク轉々叫呻顔良慘憺トシテ氣息將サニ絶ヘントスルニ際シ尙ホ家ニ在ル幼兒ヲ懷フテ止マズ屢々他ヲ願ヒテ曰ク妾ノ死ヤ元ヨリ以テ怨ムヘキナレ然リト雖トモ兒ヤ尙乳哺ス妾死スルノ後チ誰カ妾ニ代リテ之レヲ育フ者ソ雖々トシテ寒夜襪履ノ薄キヲ訴ヘ呱呱トシテ曉且飢ヲ告ク妾ニ非スレテ誰カ又之レヲ知ラシヤ妾ヤ兒ノアルアリ死スト雖トモ瞑セスト病苦ノ外更ラニ苦痛ノ堪ヘサル者アルニ似タリ聽ク者皆袖ヲ潤シ滿室轉々蕭然タリ著者論スニ孤兒院ノ例ヲ説キ慈善家ノ救ヲ語リタルニ稍ヤ肯ニスルカ如ク信シタルカ如ク從ツテ苦惱緩解シ心神安靜タリ強ク著者ノ手ヲ握リ慘々涙ヲ垂レ漸ク將ニ天國ノ近ツクヲ告ケ慰慰後事ヲ托シ佛佗ヲ念シツ、眠レルカ如クニシテ終ニ逝ケリ豈又悲シカラスヤ此ノ如キノ例蓋シ枚擧ニ遑アラス故チ以テ看護婦ハ時トシテハ僧侶トナリ



12/34

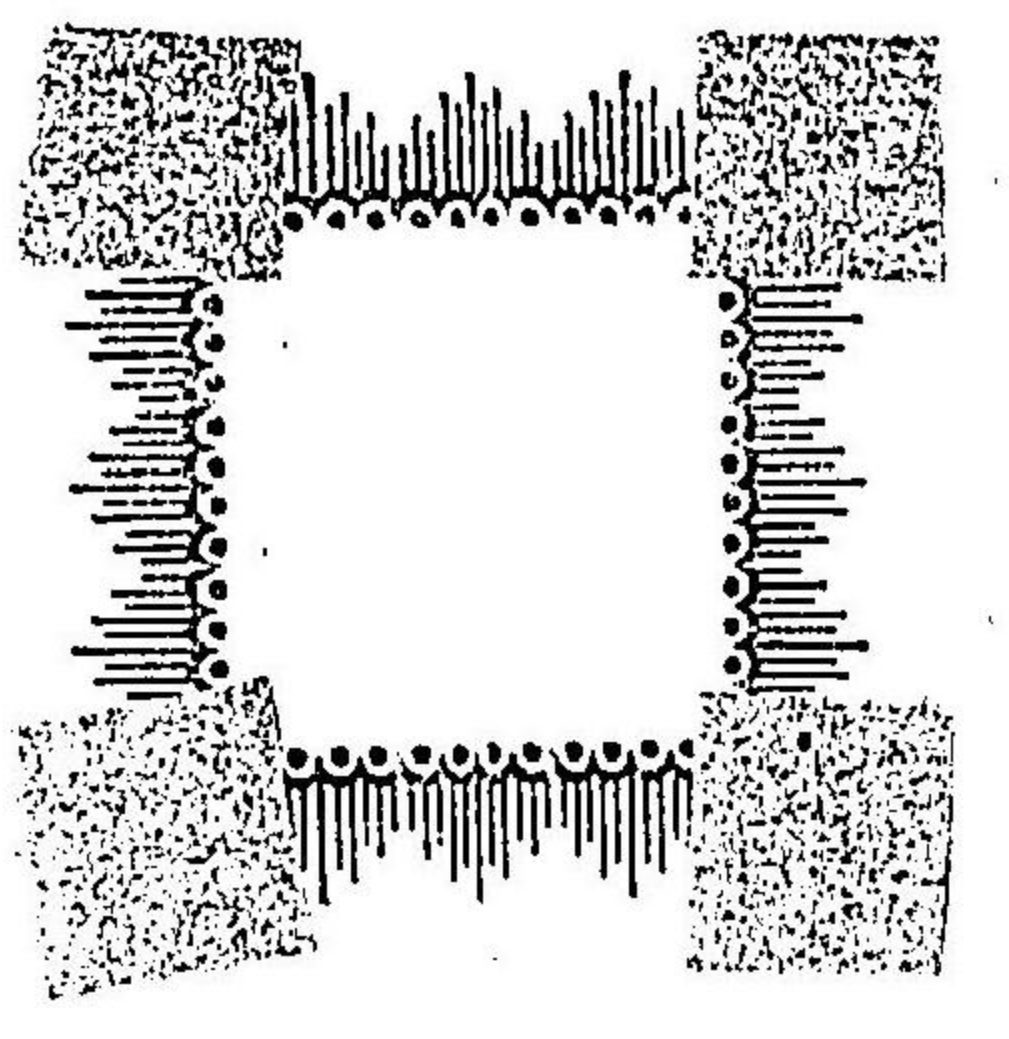
テ因果ヲ説キ牧師トナリテ福音ヲ説キ祗司トナリテ天道ヲ説キ手段  
 ト方便トシテ盡シテ以テ甘願セシムルヲ要ス。嗚呼甘願ハ看護ノ秘訣ナリ之ヲ學シテ得ヘカラス之ヲ教ヘテ至  
 ル可ヲス天真爛漫至誠涕洟慈悲同情ノ極以テ此域ニ達スベシ著者曾  
 テ茲ニ感スル所アリ敢テ一言ヲ卷末ニ加テ願フニ職ニ看護ニ從事ス  
 ル者須ラク自ラ此言ノ妄ナラサルヲ首肯セラル可キヲ信スルナリ

八種傳染病看護法後篇終



明治三十四年五月十五日印刷  
明治三十四年五月廿四日發行

定價金五拾錢



滋賀縣甲賀郡水口町大字水口四千三百六十四番地

著者兼 發行人 油川 太 嘉

滋賀縣甲賀郡水口町大字水口三千二百四十番地

印刷者 杉 江 倭 三 郎

滋賀縣甲賀郡水口町大字水口三千二百四十番地

印刷所 甲 賀 活 版 所

大阪市南區心齋橋筋二丁目  
六十七番邸

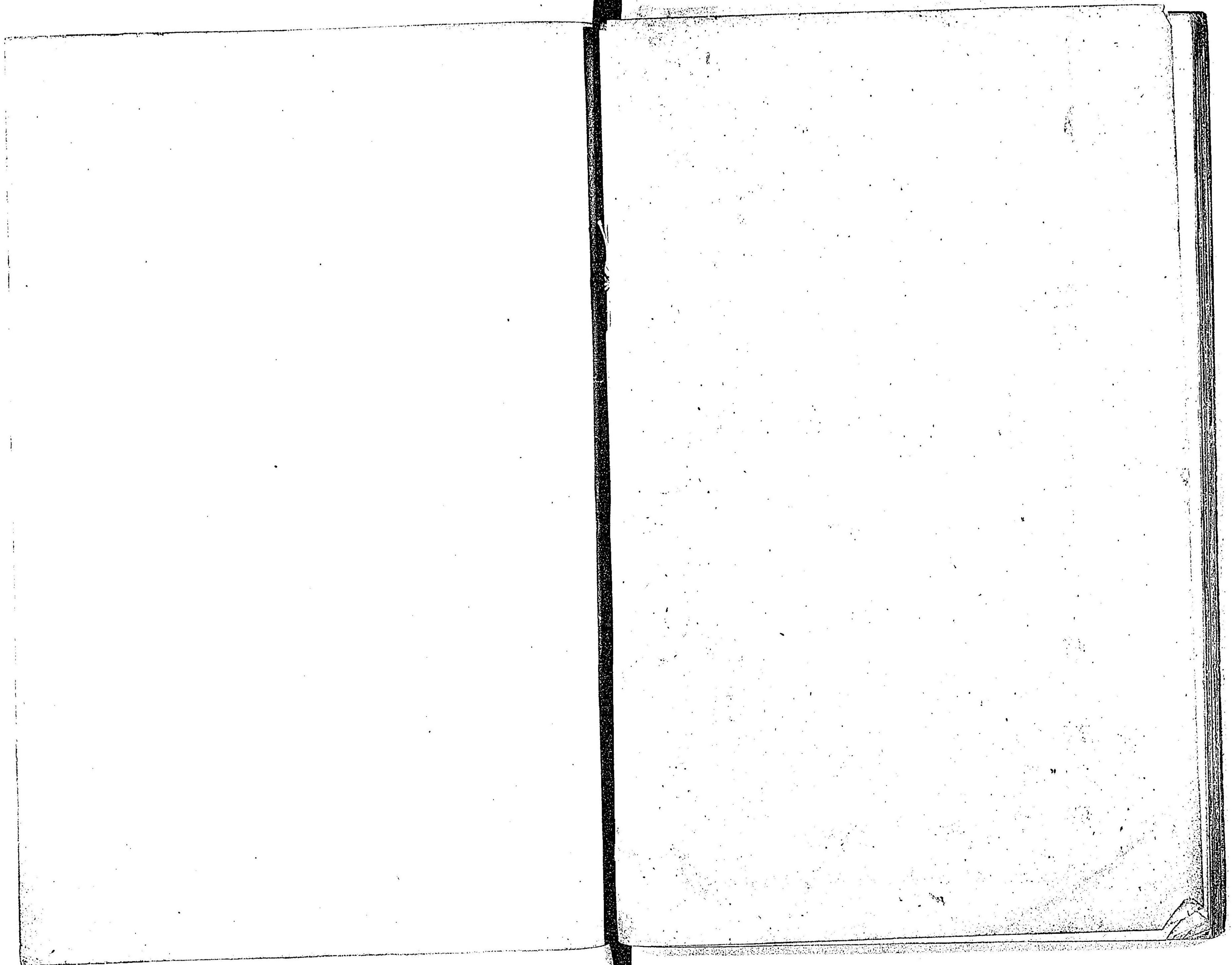
松村 九兵衛

販賣所

滋賀縣甲賀郡水口町

藪 音次郎







60  
105



